２０２４年 2月 国際放送番組審議会

２０２４年2月のＮＨＫ国際放送番組審議会（第７１０回）は２０日（火）ＮＨＫ放送センター（ウェブ会議）で９人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず最近の国際放送の動きについて説明があり、意見交換を行った。引き続き、「NHK NEWSLINE」、「NEWSROOM TOKYO」、「NEWSLINE In Depth」のほか、「災害報道における国際放送の役割」について説明があり、意見交換を行った。最後に、国際放送番組の放送番組モニターと視聴者意向の報告を行い、会議を終了した。

（出席委員）

委員長	永井　均	（歴史学者、広島市立大学広島平和研究所 教授）
副委員長	阪田　恭代	（神田外語大学グローバル・リベラルアーツ学部 教授）
委　員	遠藤　乾	（国際政治学者、東京大学大学院法学政治学研究科 教授）
委　員	髙祖　歩美	（情報・システム研究機構　国立遺伝学研究所 ＮＢＲＰ広報室長）
委　員	坂野　晶	（一般社団法人ゼロ・ウェイスト・ジャパン 代表理事）
委　員	渋澤　健	（シブサワ・アンド・カンパニー株式会社 代表取締役 コモンズ投信株式会社 取締役会長）
委　員	杉山　晋輔	（早稲田大学 特命教授、前駐米大使）
委　員	中村　勇吾	（インターフェースデザイナー、tha ltd. 代表）
委　員	村上由美子	（ＭＰｏｗｅｒ　Ｐａｒｔｎｅｒｓ ゼネラル･パートナー）

（主な発言）

＜最近の国際放送の動き、災害報道における国際放送の役割について＞

NHK NEWSLINE「Extensive Damage in Nanao City」　（１月２日（火）放送）
NHK NEWSLINE「Foreign workers struggle for support in quake aftermath」
（１月５日（金）放送）
NEWSROOM TOKYO「Aging Communities Shaken by Quake」
（１月９日（金）放送）
NEWSLINE In Depth「Noto Peninsula Quake Leaves Foreigners Feeling Isolated」
（１月３１日(水)放送）

○　今回の４つの視聴番組について、ニュースの短い特集企画だったが、タイムリーでよくできていてよかった。能登半島地震や１月２日に発生した羽田空港 航空機衝突事故の報道について、ＮＨＫのほかＣＮＮやＢＢＣも見ていたが、特に羽田の衝突事故は、日本航空の乗務員が奇跡的に死傷者を出さなかったということが日本国内より大きく報道されていた。それ自体はよいことだと思うが、斜に構えた見方をすると、今や日本が報道されるのは、こうした災害や事故で大きなニュース性のある時というの

が現実だ。能登半島地震で亡くなった人や皆さまに、まずはお悔やみと心からの哀悼の意を表したいが、このような悲劇が起こり国際的な関心があるときこそ、海外に向けて公正で正確な情報を発信していくべきだと思う。特に「NEWSLINE In Depth」は、これだけ努力しているが在留外国人には情報が足りていないという客観的な報道をしており、よいと思った。海外の人に不安を与えすぎるのはよくないが、国内向けにもこうした放送をするべきではないか。いずれにしても今、日本発のニュースはかなり努力しないと海外メディアに取り上げられないという現実がある。こうした事件・事故などの惨事があったときは、ＣＮＮやＢＢＣも一斉に報道するので、日本側の発信として、ＮＨＫはもっと発信すべきだと思っている。今回の特集企画のような発信への努力は称賛に値すると思った。

○　ＮＨＫが総力を挙げて、しかもこれまでの地震災害報道の経験を積み重ね、日頃の準備も積み重ねて、ここに至っているのだということがよく分かった。労をねぎらいたい。とりわけ、今や日本の至る所に外国人がいる中、その最も脆弱な人が飢餓状態になっている情報を提供するというところで、ここまで進歩しているのかと感銘を受けた。以前、地震災害後の研究会に加わり、仮設住宅の進化を検証したことがある。阪神・淡路大震災や新潟県中越地震、そして東日本大震災と熊本地震に至るまで、日本の仮設住宅の進化に感動したが、メディアという分野においてもここまで積み重ねてきていることに感銘を受けた。

同時にＮＨＫの踏ん張りは、公共政策の課題を浮き彫りにしていると感じた。石川県のブラジル人たちが、ポルトガル語のサイトで情報が得られることを知らなかったというのは、ウェブサイトを作ればよいだろうという受け身な姿勢が一因ではないかと思う。これはＮＨＫの問題ではなく、やはりプッシュ型というか、外国の人たちが見るサイトやメディアのフォーラムに載っていないと引っかからないということだ。そこを今回のＮＨＫの取材者たちの努力が埋めたのだろう。そういう意味で今回は本当によかったことが多かった。もう１つ付け加えると、やはり地震の時は関東大震災以降、偽情報も回る。外国人窃盗団や人工地震など、根拠不明のうわさ話がたくさん流布される中で、それについてもＮＨＫの人たちが取り組んでいる跡があって、大事なことだったのではないかと思っている。

○　ＳＮＳやホームページといったオンラインツールを駆使して、懸命に必要な人たちに情報を届けようという取り組みは、既存の放送局の概念の枠を超えた情報発信をしていると感心し、みなさんの努力に感謝したい。平時に何ができるのかを考えると、まずこれだけたくさんの情報を出しているが、本当に届くべき人に届いているのか、すでにやっているとのことだが、検証が必要だと感じた。国内の外国人や海外から来る旅行者、日本に関わる外国の人たちの中で「災害情報であればＮＨＫ」というブランディングを平時に確立し、何か起きたときにみんなが「ＮＨＫのホームページに行ってみよう」「ＮＨＫのラジオにしよう。テレビもＮＨＫに」というような形にうまくもっていけたら、今、一生懸命発信している情報がより生きてくるのではないか。また、大使館はこうした災害時、１つの大きな要になっている。既に取り組んでいると思うが、大使館の職員が、ＮＨＫは信頼できる情報をいろいろな言語で発信している、自分たちの国民にも知らせるに値する発信をしてくれると感じることが重要だと思っ

た。この機会を捕まえて、大使館職員に国際放送の多様な情報サービスを知らせると、より記憶に残るのではないか。

留学生は大使館というより大学に情報を問い合わせると思うので、若い学生たちへの周知であれば、大学の留学生を管轄しているであろう国際部のようなところに、多言語の災害情報提供を周知するとよいのではないか。

○　まず、災害直後のアプリなどを通じた速報は、私も通知を登録しているので届き、大変よかったと思っている。改めて感謝を伝えたい。一方で、アプリがあることやＳＮＳでも発信されていること、ウェブサイトでの言語選択ができることなど、信用できる媒体としてのＮＨＫの存在が特に在留外国人たちに届いていないのは、改めて本当にもったいないと思った。例えば、在留目的で日本に来た人たちが最初に入国して得る情報の中に「登録しなさい」と入っているぐらいの何かしらの仕組みを作ったほうがよいのではないか。学生であれば大学かもしれない、在留や技能実習生という形であれば、受け入れの会社など、必ずチャンネルがあるので、連携をしながら、そうした制度設計をぜひ行ってもらえたらうれしい。また現地でのアクセシビリティーが海外からも懸念と疑問を持たれて見られていたようだ。ワールドニュース部の記者たちが地震発生後すぐ現地に入り、２日目からリポートをしていたことも今回拝見した。現地の現状ももちろん伝えるべきだが、いわゆるアクセスの難しさ、物資の支援やその受け入れ状況、今回は日本が支援物資を受けられないようだが大丈夫だろうかという話も一時、出回っていたので、その辺りの実際の事情の発信を海外へ向けて強化するとよいのではないかと感じた。日本から“ＢＯＳＡＩ”ということばが世界に広がっているように、例えば東南アジアでは、“disaster preparedness（災害への備え）”という表現が、比較的、環境教育とセットで防災教育が少しずつ広がっている。今回のこのタイミングだけではなく定期的な発信が続くとよいと思っている。

○　今回強く印象に残ったのは、１月５日に放送された、技能実習生が裸足で逃げ惑っている姿だ。恐らく本人たちがスマートフォンで撮った映像だったと思うが、今まで見たことのない緊迫感のある映像で、その時の状況をリアルに伝えていたと思う。外国人労働者についてまとめた特集もあり、技能実習生の行き場所がなくなるといった報道があったが、そもそもそうした技能実習生の受け入れ先の人たちはどうしていたのか。本来であれば受け入れ側が技能実習生の面倒をきちんと見るのが当然のことだと思うが、そこの部分をもう少し掘り下げてもらえれば、場合によって実はいろいろな不幸が起こっていたということも浮き彫りにできたのではないか。また、番組の中でＱＲコードが画面に出たのはとてもよいと思った。見ている外国人が、気になることがあれば、そのＱＲコードからいろいろな情報にアクセスできる。とてもすてきな工夫だと思った。

残念なのは、既にほかの委員からのコメントにもあったが、情報発信されていることを知らなかったという点だ。平時にもいろいろ働き掛けることが、とても大切ではないかと感じた。

○　皆さんが述べたように在留外国人にフォーカスするという、ＮＨＫワールドＪＡＰＡＮならではの切り口がよかったのではないかと思う。労をねぎらいたい。

今回見た番組に限らず、やはり地震のような大きな災害があると、どうしても被害の大きい場面をスポット的に取り上げるような報道になりがちだが、視聴者は、今はもっと面的というか、ふかん的な情報をもっと知りたいのではないか。先ほども、いわゆる被害マップのようなものが一番見られていたという報告があったと思うが、そうしたことを物語っていると思う。例えば家屋が倒壊するシーンや道路が寸断されている場面が放送されたが、実際に倒壊した家や、寸断している道路はどの程度なのか、５割なのか１割なのか。もちろん地震直後は難しくても、ある程度時間がたったときに、そのようなデータを分かりやすく可視化させた形で見せていくのはＮＨＫの役割ではないか。

それからもう少し先の話になるだろうが、能登の地域が復興していくときに、今の報道によって「ほとんど壊滅してしまった」というようなイメージが定着しないよう、ある程度、実は大丈夫だったというところを積極的に報道してもよいのではないか。

○　地震直後の最も緊張するタイミングの報道を見ていたが、東日本大震災の教訓を得て、「とにかく早く逃げてください」というメッセージを、本当に緊迫感を持って報じたことに大変感銘を受けた。地震は、早く行動することが人命を救う大きな境目になるので、そこを報道の立場からとにかく英語でもほかの外国語でも、どんな人が見ていても分かる感じで緊迫感を持った報道の仕方をしたところは評価に値すると思う。

今回視聴した番組は、ある程度時間がたち少し状況が落ち着いてからの報道が中心になっているが、裸足で逃げているインドネシアの人の映像など、緊迫感のある生々しい様子を伝えており、いろいろな意味で非常に質の高い報道になっていた。このように大きな地震の後は、日本ではその後の復興に関しても詳しい報道がされるが、ほかの言語になると、時間がたって情報の量が減ってしまう。仕方がないと思う一方で、今後、日本は、日本語を話さない人たちを含め多くの外国人が定住していく国になるであろう。災害の直後だけではなく、災害後の復興の道筋が多くの人たちに共有されることがとても重要だ。こうした報道は、なかなかほかのメディアにはできないところだと思うので、引き続き、国際発信を続けていってほしい。

○　災害報道がマルチメディアに展開されていることがよく分かった。第一に、フォローアップ報道として、より正確に日本、石川県、輪島の状況などが伝わるようにすることが大事だ。痛みを抱えているところもまだあるが、石川県全体が被災地域ではない。観光客などが行けるかどうかもわかるよう国際発信してほしい。周辺で観光収入も入れば、結果的に被災地域を助けることになる。第二に、テクニカルな話だが、キャスターは以前よりも安定感が大変増していた。リポーターをより積極的に活用していることも有意義だ。ただ、リポーターの中には、当然ながらまだ英語報道に慣れていない人もいる。英語を母国語とする人に伝えたい場合、彼らにとって聞きやすいことばの抑揚や間のおき方もある。災害報道は特に正確な情報発信が重要になる。 そのために平時から、英語ニュースの伝え方のトレーニングを局として実施していくと効果的だ。第三に、在留外国人、訪日外国人を含めた被災者への情報の伝え方だが、国内放送で緊迫感をもって伝えられていた一方で、地震のアラートは、全国向けなのか石川県だけなのかが区別しづらかった。恐らく訪日外国人や観光客、家族・親戚などが日本を訪問している海外の視聴者などにとってはさらに心配な状況だったと推察す

る。よって、緊急時のアラートについて、アラート音だけではなく、説明も入れて伝えると効果的ではないか。平時の取り組みがやはり大事だということが今回の報道でわかった。地方自治体、外務省、大使館、総領事館、領事館、外国人の子供や家族との付き合いがある教育機関、外国人労働者を雇っている会社などと、例えばセミナーの場など、いろいろな形でエンゲージメントしていくことが大事だ。ＳＤＧｓの「誰一人取り残してはいけない」という意識で取り組まないといけない。第四に、今回の災害報道のフォローアップとして、再生回数、アクセスのみならず、どのようにウェブサイトが利用されたのか、ＮＨＫの中で点検するとよい。サイトの中で、在日外国人のために災害時の生活情報をまとめるサイトを作ったことは有意義だ。ただし、冒頭に“useful information”という題名をつけているが、日常生活の便利な情報と勘違いする可能性もある。平時の情報なのか、災害時の情報なのかがわかるよう、動画の表現を工夫したらよい。以上の通りだが、今回の災害報道で、ＮＨＫの中で国内放送と国際放送の連携が重要だということが改めて証明された。２０２４年度国際放送番組編成計画の柱の中でも、国内放送との連携やデジタル活用により効率的な展開を推進するという指針があった。主に平時の番組を想定していると思うが、災害報道も国内放送との連携の中に入れていくことが大事だ。

○　ＮＨＫが、積極的に果敢に迅速に、外国人の支援に尽力していることがうかがえて本当に感動した。お礼を言いたい。視聴番組の特集は、どれも素晴らしいリポートだった。インドネシアの若者たちが裸足でとにかく逃げている場面は、強烈なインパクトがあった。また、避難所に多言語でメッセージを書いておくことが実は重要だという指摘は、大変勉強になった。基本的に、在留外国人や訪日外国人、旅行客、さらに在外邦人などはいわゆる災害弱者になりやすいため、彼らが災害情報や災害支援から取り残されることのないような情報を提供するということが国際放送の役割だと思う。これは２０２４年度、国際放送の番組編集の基本計画の重点項目の４番目に据えられているものだが、既にＮＨＫの皆さんはこれを実践されているのだということを改めて感じた。ぜひ今後も災害時の外国人のいわばライフラインの１つになるような情報発信の役割を果たしてほしい。能登半島の被災地への今後の対応としては、引き続き在留外国人の震災支援について、各種情報と入手方法を積極的に伝えてほしい。その際、高齢者や病気を抱えている人、障害者、女性や子どもの存在にも配慮した、そういった意味でのきめ細かな情報を届けてほしい。外国人が居留する地域やコミュニティーごとの関連情報が当事者に届くと、有用、有益ではないかと思う。平時に取り組むべきことは、災害報道の過去の事例検証の仕組みなどが挙げられると思う。国際放送がこれまで蓄積してきた災害関連情報について、被災地の声や取材者たちが感じた報道の成果と課題、さらには視聴者からのコメントやリクエストなどもあると思う。項目ごとに整理、検証して、それをさらにアップデートしながら次の災害に備えてほしい。これに加えて、より効果的なアウトリーチの方法を模索していくことも重要だ。引き続き検討してほしい。われわれが海外に行ったときもそう感じることがあるが、外国人は、災害現場で被災弱者になりやすい。そういった状況下で在留外国人・訪日外国人、そして在外邦人が孤立しないように、ＮＨＫには彼らを情報面で支える態勢について、平時から検討していただければ、と思う。

（NHK側）　ご指摘が多かった、ブラジル人たちがポルトガル語で情報発信しているウェブサイトがあることを知らなかったという点についてだが、まさに皆さんが指摘されたように、自治体としては取り組んでいるのにもったいない、それを伝えていこうという話をチームとした。自治体の人たちはたくさんのことに取り組んでいる。対応に手を抜いているわけではないのだから、ウェブサイトがあるなら、それをきちんと正しく届くようにするだけで全く違う結果になるということを伝えたいと思った。例えば、番組ゲストの専門家から、避難所に英語の張り紙を１枚張るだけで外国人は安心できる、日本人も「こういったことばを話す人たちがこのあたりにいるのだ」ということが分かり、お互いに慮ることができるのではないか、とおっしゃっていて、まさにそのとおりだと思った。そういう気付きを視聴者と共有できればよいと思い制作した。

（NHK側）　記者グループは今回２つの柱を挙げて取材をした。１つは被災地で何が起きているのかを伝えるということ。現在は「何が起きているのか」から「何が問題になっているのか」というフェーズになっているので、フォーカスの当て方を工夫して取材をしていきたい。もう１つは在留外国人の状況についてだ。ご指摘があった、インドネシア人が裸足で逃げたというニュースだが、あれはまさに地震当日の１月１日にご本人たちが撮ったビデオだ。在留外国人が困っているという情報は、自治体や公的団体ではなく、地域のキーパーソンや支援団体の人たちに入っているということがほとんどだった。特に石川県沿岸地域は技能実習生が多い地域で情報過疎になっている。情報が全くない状況で逃げていたというケースがいくつもあった。今回取材した記者たちも、「ニュースとして放送しているが、なかなか届いていない」と実感している。取材した結果をどのように放送に生かしていくのか、放送だけではなく英語も含めて、どのように役立つ情報にしていくのかをフィードバックしていきたいと思っている。

質問にあった技能実習生の雇用主の話だが、技能実習生の多い地域なので雇用主や管理団体が非常に重要な役割を果たすと思う。今回被害が出なかったのはたまたまだと思っている。私たちが取材した範囲で言うと、雇用主が何か体系だって避難を誘導したというケースは実は少なく、たまたま漁船の船長さんが声を掛けてくれたとか、地域の方が呼びに来てくれたなど、何かマニュアルがあって逃げたというケースは残念ながらなかった。雇用主の責任は大きいと思うが、なかなかそこまで体系だった支援をしているというのは、まだないのではないか。現在、３・１１に向けて取材をすすめているが、東北も技能実習生が多い地域で、なかなかうまく情報が伝わらず避難できなかったということを教訓に、いろいろな取り組みが始まっている。宮城県では、雇用主が体系だった支援を始めたところもある。取材内容を還元していきたいと思っている。

俯瞰した情報、家屋の倒壊や被害の状況について全体状況が分かるような発信はできないかというご指摘があったが、実は石川県は４割の家屋が全壊しているというデータがある。ニュースで伝えているが、可視化され

ていないという指摘は全くそのとおりだ。もっと目で見て分かりやすい情報、ただ発信するだけではなく、届く情報の発信の仕方を今後考えていかなければいけないと改めて思った。

（NHK側）　可視化という点においては、今回実は、国内向けの情報発信をしている部局が、取材情報をもとに、給水所と避難所に関して、どこに給水所があり、どこに避難所が開設されているかという地図をウェブサイトで立ち上げている。地図そのものは日本語だが、例えば石川県に住む外国人でも、地図上で自分が住んでいる所は分かるかもしれない。また、ＧＰＳ機能が付いているスマートフォンやタブレットからアクセスすれば、現在地を自動的に示してくれるので、そこから一番最寄りの給水所に行ったり、避難所に行ったりすることができる。今回、初めてそうした地図を掲載して実際にアクセスも伸びたので、必要とされていると実感した。このサイトにリンクを貼り、地図の見方を英語で説明するなど工夫するだけで随分とアクセスしやすくなる。今後より広く流通させる工夫と英語化の発信を心掛けていきたいと思う。

（NHK側）　平時からいかに見てもらうか、いろいろプロモーションをしていく中でその難しさを痛感している。特に多言語の情報については、国際交流協会や自治体の人と話をしたり、大学でもイベントを行ったりしたが、知らない人が今でも多い。やはりふだんから知ってもらっていないと災害の時に「ここのサイトを見ればいい」ということになかなかならないと強く感じている。そのために今、取り組んでいるのは、外国語のニュースと防災情報というウェブサイトのリニューアルだ。多言語へのニュースやＳＮＳなど、そういったところの入り口をまとめた、いわゆるポータルサイトになっており、自治体の人にも分かるように、日本語も少し併記したサイトになっている。今はリンク集という形になっているので、４月からは、防災情報、防災だけでなく、ふだんから知ってほしい、例えば熱中症対策や、最近だとクマの被害が全国で多発していたので、クマに遭遇した際の対処法など、国際放送で発信したさまざまな在留外国人の暮らしに役立つ情報もそのサイトに載せていき、もちろん災害時には一報をはじめ、速報も出していく。ふだんからそのサイトを見てもらい、「ここに行けば災害時に多言語の情報が得られる」ということを外国人はもちろん、外国人の対応をしている日本人にも知ってもらうべく進めている。ＳＮＳを活用したり、対面でのアプローチなども行い、多くの人たちに知ってもらいたいと思っている。

（NHK側）　先日、能登半島地震の被災地に行った。東日本大震災も含めて、いろいろな災害現場に行ったが、今回は、東日本大震災と比べるとエリアは大きくないが被害はかなり厳しい状況だという実感を持った。日本の過疎地域で起きた構造的な問題という部分もあり、これから経済的復興もあると思うので、ＮＨＫとしては国際放送も含めて、総力を挙げて引き続き、被災

地を忘れずに報道していきたいと思っている。

災害時の国際放送の役割に関していろいろなヒントを頂いた。少ない人数でこれだけの多言語で放送しているメディアはほかにないと思うので、今回感謝の声もたくさん頂き、公共メディアとしてやるべきことと実感した。多言語での情報発信は個別のコンテンツの周知に取り組むことも大事だが、さきほど委員からアイデアがあったように、来日した人たちが空港で何か受け取るようなものを作って、国際放送についてもそこに全部入っている、というようなことができないかについては、政府や自治体などいろいろな公的機関と協力しないとできないことだと思うので、私たち自身の努力もあるが、ぜひ委員の皆さんのお力も借りながらそういったことができる仕組みを作れないだろうかと思った。

また、俯瞰した情報をというご指摘があった。先ほど地図の話を申し上げたが、これから先、放送法が改正されればインターネット活用業務が必須業務化する中、地図や衛星写真などを使ったりしながら災害の全体像を示せるようなものにも取り組んでいきたい。２０２６年度には、「情報棟」という新しいＮＨＫの建物が建つ予定である。そこでは、国内放送と国際放送のシステムが一緒になるので、国内と海外向けの放送をより一体化させ、充実させていきたい。災害報道は最も充実させるべきことの１つだと思っている。今日皆さんから頂いたヒントを噛みしめながら、さらにブラッシュアップしてよいものにしていきたい。

○　ＮＨＫは放送が使命なので、基本的に被災地の情報を放送することが大事だと思うが、その中で見えてくる公共政策的な課題も大変重要だ。今回の報道取材の中で分かったことを番組などで断片的に伝えることも含めて、かなりのことが総括できると思う。理事や地域局の局長を含めて、地方自治体や中央防災会議や防災担当大臣などへも問題提起することがやはり大事なのではないか。

２０２４年 1月 国際放送番組審議会

２０２４年１月のＮＨＫ国際放送番組審議会（第７０９回）は１６日（火）ＮＨＫ放送センター（ウェブ会議）で９人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず最近のＮＨＫの動きについて、続いて最近の国際放送の動きについて説明があり、意見交換を行った。引き続き、NHK WORLD PRIME「Finding My Mirror」、NEWSROOM TOKYO「Analysis: Philippines' strategy in the South China Sea」について説明があり、意見交換を行った。最後に、国際放送番組の放送番組モニターと視聴者意向の報告を行い、会議を終了した。

（出席委員）

委員長	永井　均	（歴史学者、広島市立大学広島平和研究所 教授）
副委員長	阪田　恭代	（神田外語大学グローバル・リベラルアーツ学部 教授）
委　員	遠藤　乾	（国際政治学者、東京大学大学院法学政治学研究科 教授）
委　員	髙祖　歩美	（情報・システム研究機構　国立遺伝学研究所 ＮＢＲＰ広報室長）
委　員	坂野　晶	（一般社団法人ゼロ・ウェイスト・ジャパン 代表理事）
委　員	渋澤　健	（シブサワ・アンド・カンパニー株式会社 代表取締役 コモンズ投信株式会社 取締役会長）
委　員	杉山　晋輔	（早稲田大学 特命教授、前駐米大使）
委　員	仲本　千津	（社会起業家、㈱ＲＩＣＣＩ ＥＶＥＲＹＤＡＹ 代表取締役ＣＯＯ）
委　員	村上由美子	（ＭＰｏｗｅｒ　Ｐａｒｔｎｅｒｓ ゼネラル･パートナー）

（主な発言）

＜最近の国際放送の動きについて＞

○　能登半島地震の対応について一言述べたい。今回、報道の在り方として、東日本大震災から得た教訓が全体的に生きていたと感じた。特に地震直後から、正確な情報がまだ分からない段階で、各局、緊迫感のあるトーンで「すぐ逃げてください」と呼びかけていた。来るかどうか分からないが、津波が来るかもしれないので、とにかく逃げてくださいということを連呼していて、英語でも「津波が来るから逃げなさい」というような、少し恐ろしくなるくらいのトーンでアナウンサーの人たちが連呼していた。ＮＨＫばかりでなく民放も含めて、東北での教訓を生かした形の報道がよかったと伝えたい。

○　地震に関して、私もアプリでＮＨＫワールド　ＪＡＰＡＮからの速報を受け取っていた。タイムリーで有益な情報が流れてきたので、非常によかった。ぜひ引き続きお願いしたい。

○　今回のWorld News部の報告では、ガザ情勢の報道についてあまり出てこなかった印象があった。日本政府はガザ地区やパレスチナに対する援助を税金で行っていて、何か再建するたびに壊されている。ウクライナについては、国際放送局にはウクライナ人職員もいて頻繁かつ精力的に取り上げられており、よいと思っている。ガザ地区やパレスチナについても、すでに 12 月に取り上げた、もしくは今準備中かもしれないが、もう少し主体的に日本として、ＮＨＫとして何かできることがあるのではないかという気がしている。

（ＮＨＫ側）　今回の能登半島地震は専門家の間で千年に一度とも言われる大きな災害だ。半島の先で起きたという地理的条件からインフラ、道路や上下水道等が壊滅的な被害を受け、そこに雪も加わった。被災地は非常に過酷で厳しい状況にあり、復旧作業にも時間がかかるだろう。テレビの電波が届かない、電話回線が不通など、いろいろな障害があり、ＮＨＫとしてはテレビ、ラジオ、それからインターネット、国際放送、あらゆるメディアを使って情報を届けようと取り組んでいる。国際放送局の担当者も含めて 100 人を超えるＮＨＫスタッフが現地入りをしているが、取材者にとってもかなり厳しい環境で、１週間ほどで交代しながら災害報道を続けているところだ。

「過去の災害の経験が生かされているのではないか」とのご意見はありがたい。特に今回、地震発生時に津波からの避難を呼びかける強い調子のアナウンスについては、好評意見を含めいろいろな反響があった。東日本大震災が起きた時に、アナウンサーたちが当時のやり方でいろいろな呼び掛けを行ったが、避難をせずに亡くなった人も多かった。アナウンサーたちは、「何かできなかったのか」と無力感に苛まれ、「どのようにしたら救えるのだろう」と強く思い、災害の専門家あるいは災害担当の記者などと議論を重ねながら、あのようなスタイルをつくってきた。今回の災害報道もうまくいったこともあれば、課題もある。残念ながら災害は繰り返される。起きるたびに課題を抽出し、進化していかなければならない。委員の皆さんからいただいた意見をさらに生かしていきたい。

アプリについてのコメントにも感謝する。災害対応の全体状況を伝えるというのは、マスメディアにとっては得意な部分だが「私の地域、私の家はどうなるのか」「私はどうしたらいいのか」といった身近な情報を届けることは、必ずしも得意ではない。その点をこれから補っていくのが、デジタル、インターネットの世界だと思っている。個人にとって必要な情報をできる限り流し、人の命を救うために、公共メディアとして新しい役割を担っていきたい。今回も、例えば被災地域外の視聴者から「私の家族が孤立している」という情報があり、孤立情報をマップの形でインターネット上に掲載した。その結果、自治体が把握していない所に孤立地域があることが分かり、自衛隊が救援に向かうことができた。家族からは泣きながら「ＮＨＫが見捨てないでくれたおかげだ」ということばもいただいた。不特定多数に向けて伝えるべき情報と地域などに伝える身近な情報の部分を、これからはうまく使い分けながら災害報道していくというフェーズ

になっている。そういった意味で、アプリもこれからも進化させていきたい。ご意見があればまた聞かせてほしい。

（ＮＨＫ側）　ガザ地区やパレスチナについて日本がどのように関わっていくのかというのは、大事な視点だと思っている。今年になって能登半島地震や羽田空港での事故などが発生し状況が一変したが、イスラエル・パレスチナの情勢も大きなニューストピックの１つだ。１０月７日の発生から２か月、３か月と経っていく中で、引き続きご指摘の点も含めて、現地の支局とも連絡を取りながら日本らしい、ＮＨＫらしい報道ができるように努めていきたいと思っている。

＜NHK WORLD PRIME「Finding My Mirror」（１２月２３日（土）１０:１０ ほか）
NEWSROOM TOKYO 「Analysis: Philippines’ strategy in the South China Sea」
（１２月２３日（土）１０:１０ ほか）について＞

○　「Finding My Mirror」は、私の知らない世界で、「なるほど、このような努力をしているのか」と大変興味深く見た。ただ、ＮＨＫの国際放送の枠はそれほど多くなく、取り上げたい話題もたくさんある中で、この番組を取り上げているねらいはどこにあるのだろうかと疑問を感じた。海外向けの放送は、政府と同じでなくてよいが、やはり日本として海外に発信したい、理解を深めたい、といった観点で、伝える内容であってほしい。イギリスの制度を真似たということも資料に書いてあったが、それが国際放送する理由なのか少々ピンとこない感じがあったので、制作した人はどのように考えたかを聞きたい。

「NEWSROOM TOKYO」の１０分ほどの特集はよくできていた。ＡＳＥＡＮ（=東南アジア諸国連合）の中でも特にフィリピンに焦点を当てるのは、今のこの状況では適切だと思う。国連の海洋裁判の仲裁裁判で判決が出ているにも関わらず全く言うことを聞かない国を相手に、日本も対応しなければいけないところなので、的を射た分析だったと思う。しかし率直なところ、１０分で取り上げるのはなかなか難しい。コンパクトによくできている特集だったが、別途もう少し掘り下げて伝えたほうがよいのではないかと感じた。

○　２番組とも興味深く見た。とりわけ「Finding My Mirror」はストーリーの流れは静かだが、内面が繊細に揺れ動き、心にしみ入るような番組だった。気になったのは、この番組で紹介された更生プログラムのモデルはイギリスだと言っていたが、イギリスのプログラムだと父親が映像に出ていたが日本だと女性の受刑者だけだったことだ。どれぐらい母性のようなものを前提にしたプログラムなのか。家族という意味では、男も女も、老若男女も、子どもがいる人もいない人もいろいろなケースがあると思うが、このプログラムの前提が気になった。

「Analysis: Philippines’ strategy in the South China Sea」はよくできていると思った。大統領だけではなく、中国側のスタンスの変化と日本の役割というものも

最近の変化として盛り込まれていて、あれだけの短時間によくまとめたと思うが、もう少し別の要素も取り上げてほしいとも感じた。例えば、日本の巡視船の話が出ていたが、巡視船の供与などだけではない、もう少しプラスアルファの新しい日本側の動きとの連動など、１つの番組でできることには限度があると思うが、そのような掘り下げなどもおもしろいのではないかと思った。

○　「Finding My Mirror」は、心にしみる内容となっていた。「事実は小説より奇なり」と思いながら、このドキュメンタリーを見た。例えば受刑者の一人が途中でがんを発症したり、刑期を終えて出所した人が、連絡がつかなくなってしまい「もしかしたらまた悪い道に」というような展開があったり、これらは台本があるものではない。やはり１年間かけて取材をしたことが、受刑者の人たちとの人間関係、信頼関係の構築につながり、あそこまで深いところを追うことができたのではないか。質の高いドキュメンタリーだった。これこそが、おそらくＮＨＫのような制作者でないとできない、評価に値するものと思っている。一方で、これはもちろん海外の人に見てもらうということで作っているわけだが、その意味合いがどこにあるのか、これこそ日本の人たちにも見てほしいと思いながら見た。

フィリピンについての特集もよくできた内容であった。しかし、このニュースを見る人たちがどんな人なのだろうと考えたとき、おそらく日本語は分からず、英語のニュースに頼っている人たちであろうと想像する。いくらでもほかに英語の情報ソースがある中で、ＮＨＫのこのニュースを見て何かしらの貴重な情報が得られると考えるなら、それは何かということはもう少し深く考えたほうがよいと思っている。番組の中でも少し触れていたが、おそらく、日本の立ち位置や日本の報道であるがゆえの付加価値を考えて内容をもう少し掘り下げて、番組の中に生かしていくのが重要なのではないかと思った。

○　「Finding My Mirror」について、知らない世界を覗かせてもらった感覚があり、多くの発見があった。このような若い女性が薬物に手を出して刑務所に入ってしまうことを全く知らず、新たな気付きになった。しかし、そういった知らない世界でありながら、とくにブルブル君の絵本をめぐって、子どもに対する愛情やずっと心に潜めていた思いが絵本を通じて出てきたというストーリーがあり、美しいと感じた。また、出所後まで追った制作や編集の姿勢がよい。実世界に出るといろいろあるということも描いていて、現実味を感じた。なぜこの番組が外国向けかという意見があったが、外国から見て日本というのは安全で豊かというイメージが一般的な中で、登場する女性たちの背景にやはり社会的格差や貧富の格差といった実態があり、「実は日本でもそのような課題を抱えている」ということを見せていた。国際放送として意義がある大事なことかもしれないと思った。

２つ目のフィリピンと中国を取り上げた特集企画は、放送時間も限られるため、日本から見た、あるいはフィリピンから見たという視点でいいのかもしれないが、「なぜ中国はそのようなことを考えて実行しようとしているのか」というところはよく分からなかった。もちろん、相手は民主主義の国ではないので、「民主主義」対「民主主義ではない国」という線引きで触れなくてもいいのかもしれないが、両方の視点を提示して「あなたはどう思うか」という報道の仕方もあると考えたときに、中国側の視点

が見えなかったと感じた。また、ナレーションが少々硬かった。台本を読んでいるような感じがあり、もう少し臨場感があれば、グッと内容には入り込めたのではないか。

○　「Finding My Mirror」は、絵本を使った更生プログラムを通して受刑者自身が自分自身の過去も振り返り、内面が変化していく様子が手に取るように分かった。また子どもを思う気持ちが丁寧に描かれていて、本当に心を揺さぶられる内容だった。特に印象に残ったのは、ゆりさんという登場人物が、刑務所内で話をしている時、子どもを思って読み聞かせをしている時、そして出所後と、場面ごとに声が変わっていくことだ。同じ人なのかなと思うぐらい声の質が変わり、更生プログラムの効果があると感じた。また、それだけだときっと美談で終わってしまうところを、出所してからどれだけ現実が厳しいのかということも描いたところに、単に「この更生プログラムがよい」ということだけではなくて、この問題の複雑さや大きさを考えさせてくれる内容だった。

気になった点としては、これは日本国内で先に放送されていて、そのタイトルは「塀の中で手にした鏡」だったが、英語タイトルは鏡（Mirror）だけになっていた。漠然とし過ぎて分からないのではないかという懸念を持った。また、絵本の読み聞かせに興味を持ち、英国の取り組みについて調べてみたところ、英国では全国で実施され、規模も大きく、女性受刑者に限られないプログラムのようだった。一方、この日本の取り組みは、１つの刑務所で女性受刑者を対象にしている。子どもは女性が育てる、育児は女性中心となっているという、日本社会が反映されている気がしてならない。そういった視点からすると必ずしも日本が肯定的に捉えられるような内容ではないのではないか。番組としては本当にすばらしいと思うが、海外に放送することの意味やどのような基準で放送することを決めたのか、番組の背景にある日本の価値観の深層のような部分に少々疑問を抱いた。

○　この絵本の読み聞かせのプログラムを通じて自分を省みるきっかけを提供しているということで、今回は受刑者が対象だが、見ている中で自分自身にも何か訴え掛けてくるようなものがあった。受刑者の人たちと自分自身を別ものと考えがちだが、自分も絵本を読んで過去のことなどを確かに振り返ることがある。私自身にもメッセージが当てはまるような気がして、よい番組だと感動した。また、こうした受刑者の社会復帰に関しては、やはり社会に出てからも差別や社会的、経済的な安定が得られないなどの苦しみが待っていて、実は社会に出てからのほうがより残酷だったりする。美談で終わらせず、そういった部分もきちんと描かれていて、私たちに何ができるのか、社会復帰に取り組んでいる人たちを孤立させず、どうにかして社会やコミュニティーの中に巻き込んでいかないといけないと気付かせてくれる内容だった。一方でこのプログラムを主催している人がなぜこのプログラムに取り組もうと思ったのか気になった。今回は女性の受刑者の話だったが、男性の受刑者を対象にした取り組みも行われているのかも気になった。

もう１つの「Analysis: Philippines’ strategy in the South China Sea」だが、背景知識を持ち合わせていなかったので、より深くＡＳＥＡＮにおける中国との向き合い方や、そこに日本がどのように関わっているのかなど、やはり別番組で掘り下げた形でより深く知りたいと思った。

○　「Finding My Mirror」は、私もよい番組だと思った。ストーリーは、感情面も含めて感じるところが多かった。子供のころ絵本を読んでもらったことがない人は、自分から読むという発想もなく、こうして絵本に触れることで自分を振り返るきっかけになるのだと実感した。英語タイトルになっている、「絵本が“Mirror”になる」という側面もよく伝わってきた。英語でこの番組を発信する意味についても、日本の刑務所はきれいであることなど、日本のよい面として見える部分もあったが、イギリスの事例と比べて女性だけなのか気になった。また、番組途中でこのプログラム自体の参加者数やその後どれだけの人が再犯をしなかったかという数字が出てきたが、このような受刑者が増えているのではないか、といった社会背景について知るための数値に触れるのも、有益な情報であったのではないか。

フィリピンの特集はコンパクトで情報量が多いものの、分かりやすいと思いながら見た。このトピックに詳しいわけではないので勉強になったが、コメントを読んでいるだけに聞こえてしまった部分もあった。また例えばナレーションだけではなく、図示や、関係性などについて何か補足があると分かりやすくもなるのではないかと思った。さらに詳しく知りたくなる内容なので、例えばＮＨＫワールド　ＪＡＰＡＮのＷＥＢサイト上に、同じようなトピックスでほかの情報も追いかけている番組など、次に見てほしいというコンテンツへの流入経路や紹介があればさらによいのではないか。

○　「Finding My Mirror」は、クオリティーの高い番組だった。受刑者と更生のプログラムがテーマだが、これはイギリスに学びつつも日本特有の特徴があったと思う。普遍的な課題であり、特にＮＨＫが民主主義の一翼を担うという方向で内容を強化していくという上で、罪を犯した者が施設に入り、自由を奪われるという罰を受ける一方、彼らの更生、社会復帰が大事だということを見せる、模範を示すことも必要だ。海外にも放送すべき内容だと思った。海外モニターのコメントでは、シンガポールの女性弁護士が、「興味深い内容だった。社会復帰できる可能性があり、それを社会が支援しているということが見えて、前向きなメッセージとして受け止め、とても明るい気持ちになった」とコメントしていた。民主主義は決して完全ではなく、日本も完全ではない中で、社会復帰を促せるようなサポートをしっかり行っていることを見せられたことは大事であり、普遍的なテーマについて日本の暗部を見せて追及することは意味があったと思う。

番組のタイトルについては、「Finding My Mirror」だと、化粧品やファッションの話ではないかと勘違いしてしまう可能性もあるので、サブタイトルが必要だったと感じた。海外に発信するときには「更生」や「受刑者」といったことばをタイトルに入れたほうがよい。そうしないとインターネットで検索してもヒットしない。ぜひサブタイトルにも気を付けてテーマを発信してほしい。

もう１点、今回は心打たれる内容でよかったが、支えているＮＰＯの名称も出てこないので、誰が何を行っているのか分からなかった。この更生プログラムをどのように作っているのか、日本なりのやり方をもう少し説明したほうがよかったと思う。また、施設の管理者とＮＰＯが、どういった仕組みで運営しているのかという視点をもっと入れたほうが、また違ったオーディエンスも獲得できると思う。いずれにしても非常に踏み込んだ内容で、どのように取材したのか気になった。

フィリピンの特集は、アジアの情報を発信したこと、日本が得意とするＡＳＥＡＮとの関係を簡潔にまとめて出せたことはよかったと思う。特にこの問題については、例えば　ＣＮＡ（Channel NewsAsia）やシンガポールなどは、日本の軍事関係について軍備拡張・軍備拡大というような論調で取り上げることが多く、少し誤解されている部分もあるので、日本の意図をＡＳＥＡＮの人々と一緒に考えるという視点で伝えていくことは大事だ。ＮＨＫマニラ支局長が登場したことは独自性があってよかったが、単調で話が響きにくかったところがもったいなかった。また、マルコス大統領のインタビューはもっと注目を集めるように扱ったほうがよかったのではないか。番組時間が短ければ、サイトや動画に誘導すればよい。あるいはせめて“Listen to Article”のような機能をサイトに設けてインタビューを聞けるようにするなど、効果的な発信方法もあると思った。

○　まず「Finding My Mirror」だが、刑務所内で、このような絵本を活用したプログラムがあることは全く知らなかったので勉強になった。同時に女性受刑者たちの複雑な家庭環境を知り、複雑な気持ちになった。受刑者の更生をいかに促していくか、あるいは受刑者と家族、そして子どもとの関係や絆をどのようにつなぎとめていくかというのは大変難しく、デリケートな問題だ。その処方箋の１つとして、絵本を活用するという方法は新鮮で示唆的だった。もし絵本プログラム以外に行われている更生プログラムがあれば、短い時間でも併せて紹介することで、更生の促進策における絵本プログラムの位置づけや意義がより明瞭になったのではないか。受刑者の更生というのは世界各国が抱えている普遍的な問題でもあるので、日本の実例を国際発信したこと自体、意義深いものだ。ぜひ海外視聴者の反応や受け止めについて聞かせてほしい。いずれにしても、刑務所内での長期の密着取材が許されたのは、ひとえにＮＨＫに対する信頼の証しだと思う。結果として貴重で実践的な価値ある記録になった点を高く評価したい。一方で、この番組では絵本プログラムが受刑者の社会復帰に向けた準備過程として有効な役割を果たしていることが示唆されているが、出所後にも課題があることを逆に浮き彫りにしているように感じた。海外の視聴者の中には、例えば出所者のための受け皿や伴走者のような、社会復帰を支える日本の仕組みについて関心を向ける人もいるのではないか。絵本プログラムを通してせっかく見つけ出したMirror、鏡というものが再び見失われてしまうのでないかという危惧とも関わる問題だ。今回の番組を制作する中で、こういった社会復帰を支える日本の仕組みについても議論されたのかどうか伺いたい。

次にフィリピンの特集だが、日本ではあまり報道されていない日本の隣国フィリピンを巡る安全保障環境に光を当て、マルコス大統領のインタビューも含めて最近のフィリピンの対中国政策を紹介した、意義ある番組だと思った。ご承知のように中国というのはフィリピンにとって重要な貿易相手国でもあり、昨年１１月にマルコス大統領が習近平国家主席と会談したが、フィリピン側としても緊張緩和を模索するという動きをしている。他方で最近の両国関係は南シナ海問題を巡り、かなり緊張度が高まっていて、今回の特集ではアメリカだけではなく、日本がフィリピンへの軍事支援を強めていく背景や状況がコンパクトに説明されていた。中国側の立場やフィリピンと中国の関係というものがもう少し多面的に紹介されていると、視聴者が南シナ海を巡る国際関係について、より深く理解する一助になるのではないかと感じた。

（ＮＨＫ側）　「Finding My Mirror」は、昨年７月、ＥＴＶ特集で５９分番組として放送したものを５０分に再編集し、英語化した番組だ。私自身、国内での放送を見て、受刑者の心の変遷、内面がよくわかる内容に感銘を受けた。また、今回のモデルになった英国の刑務所のプログラムとくらべ、日本のプログラムは、受刑者同士の絵本の読み合い、つまり絵本に自分を投影していろいろなことを考えさせるというところに重きを置いていると聞いており、そのプロセスもよく撮れていた。またこの更生プログラムを経て現実社会に戻っていく過程も追いかけており、その中で向かい合うべき課題といったものも描いている。そうした内容も含め、受刑者の更生は世界的な課題であり、この番組がその一助となるのではないかという思いで、国際発信したいと考えた。海外の視聴者モニターからは「薬物などの犯罪をした人たちに、私たちが何かできるということに気づかせてくれた」「彼らがたくさんの愛情を持って扱われ、どれだけ変わろうとしているのか見守っている社会があることがわかった」といった感想が寄せられ、伝えたかったことの一端は届いていると感じている。英語のタイトルに関してだが、どの番組も英語タイトルをどうつけるか悩ましい。日本語版では「塀の中で手にした鏡」となっており、「塀の中」ということばで受刑者の話であることが明瞭にわかるタイトルだった。海外展開の勉強会などではタイトルは短く「何だろう？」と思わせるものがよいといわれるので、今回も日本語版のキーワードである「鏡」を入れて「Finding My Mirror」とし、どういうことかという疑問が興味につながるようにした。また、ＮＨＫワールド ＪＡＰＡＮのサイトでは、タイトルの下に必ず短い内容説明文が入るので、受刑者の話だと理解してもらえると思い、タイトルを短くするのを優先した。しかし、委員のみなさんのご指摘を聞き、もうひと工夫できたかもしれないと反省した。一方で、エジプトの４０代男性の番組モニターからは「タイトルは巧みだった」という意見が寄せられ、タイトルの意味を不思議に思いながら見ていたが、番組の途中で「ああ、こういう意味だったのか」と合点したようだ。そうした見方があったこともお伝えしたい。

（ＮＨＫ側）　皆さんからご指摘いただいた「なぜ母親だけなのか」という点は、私も制作するうえでまず疑問に思ったところだった。尋ねたところ、実はこの刑務所でも、男性を対象にしたプログラムを開発しようとしているとのことだったが、今回の取材時点では女性を対象にしたプログラムしかなかった。刑務所では出所後の女性たちの孤立が悩ましい課題となっており、まずそこから着手したということだと思う。番組では、コメントなどでことさら「母親」を強調し過ぎないよう、配慮したつもりだ。また、イギリスとの違いについては、実はイギリスのプログラムは「子どもの権利」を守るという考えで始まったものだと聞いている。日本のプログラムは、むしろ受刑者の再犯者率が高いということで「どのようにして受刑者の出所後

を支えていくか」といった視点に変えて掘り下げ、そのプロセスを大事にしている。

次に、「出所後にも課題があることを逆に浮き彫りにしているように感じた」という意見があったが、私たちも絵本のプログラムの効果を感じた一方で、それだけでは元受刑者たちの自立を支えることが難しいであろう厳しい現実を目の当たりにすることとなった。元々、家族関係が希薄だったり、伴走者がいない状態でポンと社会に放り出されたりする人も少なくなく、その点を、今後どのように支えていくのかが課題だ。実は、この番組は地方局の短い企画から始まっており、その企画をどんどん育ててＥＴＶ特集として放送し、さらに国際発信をしたものだ。制作にあたったディレクターたちは、社会がどういった受け皿を作っていくべきなのかを考え続けている。次の取材につなげていきたい。

主宰者がなぜこの取り組みを始めたのかについては、プログラムの開発の主体は取り上げた刑務所だ。この刑務所がイギリスのプログラムを参考に提案をして、ほかの福祉施設等で絵本の読み合いを行っていた村中教授に声を掛けたと聞いている。その辺りの背景や社会全体の背景などが、少し情緒的で分かりづらかったという指摘があり、参考になったので今後に生かしたいと思う。

刑務所の中で、どうして長期間の密着取材ができたのかについては、やはりローカルの山口局や広島局が、短いニュース企画から始めて信頼関係を作り、少しずつ広げていっているのが大きいと思う。また、刑務所の中での密着はこれまでＮＨＫでもあったと思うが、出所後についてもこれだけ取材ができたのは、もともと福祉や女性の孤立、貧困といったテーマを取材してきたディレクターたちが、出所後も文通を続けて女性たちとつながり、丁寧に少しずつ信頼関係を築いて全国版、国際版へと進めていったからではないかと思っている。

（ＮＨＫ側）　南シナ海の問題、特に中国の台頭をどのように受け止めればよいかについてはいろいろな切り口があるが、今回は日本とＡＳＥＡＮの特別首脳会議が日本で行われ、来日したマルコス大統領に単独インタビューができるということで、フィリピンにフォーカスする形で取り上げた。この特集は、２７分ある「NEWSROOM TOKYO」の特集として、比較的時間を割いて取り上げたほうだが、ご指摘のとおり「これも知りたい。あれも知りたい」と疑問に思っている人たちの声をどう受け止めるのかは、われわれの永遠の課題になっている。ご指摘を聞きながら、日本の立ち位置や中国側のそもそもの狙いは何なのかといった点について、もう少し特集の時間を取り、日本とASEANが接近しようとする意図やこの会議の趣旨、狙いに対し中国側はどのように受け止めているのかといった内容を、例えば北京からの中継を交えて入れ込むという選択肢もあったのではと、思った。また、より深く知りたい人にどのように対応するかについて、インターネットで時折、例えば南シナ海のニュースが増えてきた際に「South China Sea」というまとめページ作って、そこへ誘導するためのQRコードを放送

画面に載せたりすることがある。今回はできなかったが、もっと頻繁にそうした手法を使えるようにしていきたいと改めて思った。また、マルコス大統領のインタビューはほぼ全文をインターネットに掲載しているので、テレビとインターネットをつなげる工夫をもっと行っていく必要性もあると考えている。支局の記者の読みについては、日々鍛錬しているのだが、なかなか届かないところがあり、ネイティブではない日本人がいかに英語で説得力を持って話せるのか、これからも個々に精進していかなければいけないと思っている。いずれにしても多面的な報道が必要で、この１０分間の特集に限らず、これまでもフィリピンの漁業関係者の話や、あるいは中国大陸側で民兵的な動きをする船が出航する拠点に特派員が潜入取材を試みるなど、いろいろな側面から南シナ海の問題を取り上げてきている。そういった報道をこのような企画の放送の機会に、一覧性よく視聴者へ提示していくことも含めて、これからもいろいろ考えていきたい。

２０２３年 １２月 国際放送番組審議会

２０２３年１２月のＮＨＫ国際放送番組審議会（第７０８回）は１９日（火）ＮＨＫ放送センター（ウェブ会議）で１０人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず最近の国際放送の動きについて説明があり、意見交換を行った。その後、「２０２４年度国際放送番組編集の基本計画（案）」の諮問にあたり、説明があった。審議の結果、番組審議会として原案を可とする旨、答申することを決定した。引き続き、NHK WORLD PRIME「The Day I Gave Up My Daughter」について説明があり、意見交換を行った。最後に、国際放送番組の放送番組モニターと視聴者意向の報告を行い、会議を終了した。

（出席委員）

委員長	永井　均	（歴史学者、広島市立大学広島平和研究所 教授）
副委員長	阪田　恭代	（神田外語大学グローバル・リベラルアーツ学部 教授）
委　員	遠藤　乾	（国際政治学者、東京大学大学院法学政治学研究科 教授）
委　員	髙祖　歩美	（情報・システム研究機構　国立遺伝学研究所 ＮＢＲＰ広報室長）
委　員	坂野　晶	（一般社団法人ゼロ・ウェイスト・ジャパン 代表理事）
委　員	渋澤　健	（シブサワ・アンド・カンパニー株式会社 代表取締役 コモンズ投信株式会社 取締役会長）
委　員	杉山　晋輔	（早稲田大学 特命教授、前駐米大使）
委　員	仲本　千津	（社会起業家、㈱ＲＩＣＣＩ ＥＶＥＲＹＤＡＹ 代表取締役ＣＯＯ）
委　員	新浪　剛史	（サントリーホールディングス㈱ 代表取締役社長）
委　員	村上由美子	（ＭＰｏｗｅｒ　Ｐａｒｔｎｅｒｓ ゼネラル･パートナー）

（主な発言）

＜最近の国際放送の動きについて＞

○　ベトナム技能実習生に向けた、ＮＨＫワールド　ＪＡＰＡＮアプリや日本語学習コンテンツのプロモーションの取り組みについての報告が印象に残った。これはとても大切なことだと痛感している。特定技能制度が始まったが、課題も残っているので、その話題をクローズアップする番組を企画してほしい。

○　多言語放送が外国人コミュニティーに入り込んでいるという印象をあらためて受けた。今回のモニター報告の中にも日本における外国人コミュニティーの話題を放送することの意味が伝わったコメントがあったので共有したい。「Where We Call Home: A World of Home Flavors in Saitama」という番組について、フィリピンの女性視聴者から、「カメルーンやウクライナなどのさまざまな国の、結束力がある外国人コミュニティーが埼玉県にあるのは、日本で働きたいと願う人たちにとっても心強いこと

だ」というコメントだ。「住み慣れた故国、故郷を離れて外国で働くことは大きな勇気が必要だが、挑戦したいと考えている人たちにとって自国のコミュニティーがあることは、１つの希望となる」とも書かれていた。やはり今の日本の外国人コミュニティーの取り組みを、国内にいる人だけではなく、日本に来たいと思っている人たちにも伝わるように、今後も積極的に国際放送してほしい。

（ＮＨＫ側）　ご指摘のとおりだと思う。共生社会に向けて資するような報道や番組をますます発信していきたい。

＜「２０２４年度国際放送番組編集の基本計画（案）」について（諮問・答申）＞

○　国際放送局長からの説明と、先月の審議会の意見交換も踏まえて、「２０２４年度国際放送番組編集の基本計画（案）」は、原案どおり可とする答申をしたいが、異議はないか。

○　異議なし。

○　原案を可とし、答申することにする。

（ＮＨＫ側）　番組審議会で答申を得たので、この後、この「基本計画案」を１月の経営委員会に提出する。経営委員会の議決が得られたら、来年度の具体的な番組編成を決定し、２月の番組審議会で「２０２４年度国際放送番組編成計画」として改めて説明する。

＜NHK WORLD PRIME「The Day I Gave Up My Daughter」
（１１月１１日（土）9:10 ほか）について＞

○　結論から言うと少々単純だが、私がこの番組審議会に参加して見た番組の中で一番感動した。「中国の一人っ子政策」、「共産党の支配」、「米中関係」、高速鉄道が映されるシーンでは、「貧困と今の豊かになった中国」、「あるいは養子と実子」など、いろいろな論点があり、よくできていると思った。あえて言えば、偽善的なお涙頂戴な内容でどこに焦点があるか分からないという批判はあるかもしれないが、私は率直に、５０分弱でよく出来たドラマだと思った。一人っ子政策以外にも共産党の支配や米中関係など、いろいろな側面が混在しているが、やはり共産党という国家権力による家族への介入が良かったか悪かったかというのが一番メインのテーマだと思う。普通に見れば、批判的なトーンがあると思うので、どのようにして中国当局との間で、この映像が作れたのかを差し支えない範囲で教えてほしい。

○　私も大変心を打たれ本当に感動した。ナレーションが非常に中立的であり、そして登場する人たちに思いを語ってもらうという撮り方が、見た人それぞれが考えさせられるものになっていて大変よかった。番組の最初の部分では、中国人が何人か登場したが、後半はさまざまなケースを紹介するのではなくて、１つの家族に焦点を当てたところの構成が素晴らしいと感じた。貧しい家族だが、そこには家族の絆があることを感じることができ、中国だろうがアメリカだろうが、どこでも通じるものだということを伝えていた。特に現在、アメリカと中国が対立しているというニュースが多い中、中国人の産みの両親とアメリカ人の養母という、一般人の、このような関係性はとても大切だと思った。５年後、１０年後にどのような関係になっているのかをフォローアップして再度伝えてもらえたらありがたい。

○　私も涙をこらえながら見た。とりわけ生みの母親が、義母の考えに従って生まれたばかりの娘を手放さざるをえなかったことに対し、「I don‘t know how to feel about it」、直訳すると「どのように感じたらよいのか分からない」と言っていたが、家族あるいは公的な機関によってある種の圧力の中で娘を手放すことになった、その切なさを含めて非常に感動した。

　これはこれで涙を誘うヒューマンドラマとして１つ成り立っていると思うが、このドラマの背景には、社会学、あるいは政策的、政治的なものを感じる。１つは、やはり一人っ子政策が男女のひずみを生むということだ。今は少し緩和されたが、１５年程前は120対100くらいで男の子のほうが多かった。その世代が、恐らく婚期に差し掛かっており、巨大な国なので2000～3000万人の男性が花嫁探しに苦労しているという、世界史的に見ても驚くような状況になっている。一人っ子政策が、単に国を越えて娘を手放した、ということでは済まない、男女の公共的なひずみの問題をもたらしている。２つ目に、おそらく国際養子縁組といっても、ブローカーとは言わないが、コミッションを取る仲介業者がいたはずで、それも非常に問題含みだ。もう１つは、中国政府が最もプライベートな決定というものに長年にわたり口出しをしたことの功罪だ。これはネガティブな面だけ見れば、毛沢東の大躍進政策と同じぐらいのスケールだと思うが、他方、大躍進政策と違い、功の部分もあるのかもしれない。つまり、これだけ大きな国なので、一人っ子政策を続けていなかったら貧困で中国はどうなっていたのか、食料がどうなっていたのかだ。ヒューマンドラマとしてよく出来ているかもしれないが、公共的な問題としても取り上げられないかと感じた。

○　私もとても感動した。感情に切に訴える内容で大変見応えがあったと思うが、実は、特にアメリカの、かなり多くの報道番組でこの内容が取り上げられている。番組にもあったとおり、中国からアメリカに行った赤ちゃんや子どもたちが大変多かったので、その人たちが成人して産みの親を探すということは広く行われており、報道番組のドキュメンタリーとして取り上げられているのを私も何年か前にも見たことがある。疑問なのは、なぜ日本が、あるいはＮＨＫがあえてこのような内容の番組を制作する意味があったのかというところだ。これはよい悪いということではなく、純粋になぜなのか大変興味があるところなので伺いたい。

○　一家族のヒューマンドラマとして感動し、５０分間があっという間に過ぎてしまうほど見入ってしまった。日本語版が国内放送されたと思うが、「涙が止まらなかった」といったような感想をＳＮＳ上でも見た。大変感動的なストーリーだったが、２点コメントしたい。１つは、やはり一人っ子政策の中で全員が全員、米国に養子として引き取られたわけではなく、女の子だと分かった瞬間に中絶や殺されてしまうなど失われた命があったり、人身売買の背景などもあったりしたと思う。全員が米国に渡り幸せな第２の人生を享受できたわけではないというところにも網羅的に触れたほうがよかったのではないか。また、実の親を探す手助けをしているこの人たちはどういった意図なのか、それをバックアップしているのはどういう人たちか、何か政治的なプロパガンダなどのメッセージがあるのか、などが気になった。今回はヒューマンストーリーということでミクロな視点での映像の展開だったと思うが、中国政府としてもこういう動きをどう見ているか、中国政府や米国政府としてサポートしていたりするのか、などのマクロな視点も気になった。

○　この番組を見て山崎豊子さんの『大地の子』を思い出した。歴史のいたずら、国家間や国の政策がもたらした悲劇をフォーカスし、われわれはそこから学んでいかねばならない。今回の番組も歴史の歪みというものを描いたことは素晴らしかった。今後の中国を見ていく上でも、これからこうした内容のものが出てくるとよいのではないか。歴史を振り返って見ることは、大変意味があり、私自身もとても勉強になった。

　一方で、飢餓を経験して多くの人が亡くなっている中国において、この一人っ子政策は行わざるを得なかったもので、しかたがなかったのだと思う。率直なところ中国も反省しており、相当悩んでいる。今後これを生かして世界がどのように学ぶのか、また中国がどのようになっていくのか。世界でもこの問題を理解して、反省とともに未来志向で考えていくとよいのだろう。大変意義深い内容で、全般的にはすばらしい番組だった。

○　産みの親を探すという内容の番組を初めて見たが、多くの委員と同様に、大変心を動かされた。中国全土で養子に出された子どもたちの生みの親を探しているロング・スタイさん夫妻の取り組みと、その取り組みによって実際に産みの親に会うことできた女性の物語という形で進んでいき、２部構成になっていたが、後半の実の親が特定できたグレイス・ロミングさんの物語があまりにも印象的なので、そちらが強く心に残った。グレイスさんと中国にいる産みの母親と父親、そしてアメリカで育ててくれた母親、それぞれの葛藤が生々しく描かれていて、よく伝わってきた。かつ、そうした生々しい感情は誰のせいにすることもできないという状況で、そこに心を打つものがあったと感じた。私もグレイスさんのその後が気になる。恩返しをしたいと言っていたと思うが、具体的に彼女が産みの親と育ての親にどのように恩返しをしていき、関わっていくのか、ぜひ続編を見てみたい。

○　本当にストーリー性の高い作品で、大変感動しながら視聴した。私の世代までは一人っ子政策をまだ進行中という形で見てきたが、過去の歴史になっていく中で、大きな政策の影響が個人レベルや個々のストーリーの中で実際にどうだったかを学び、実感できる大変よい番組だった。

１家族のストーリーというところで申し上げると、英語が話せるお姉さんについて、そのコメントやグレイスさんに一緒に寄り添う場面が多く出てきた。ある種、違う視点を入れるガイドの役割を構成の中で果たしていてとてもよかったと思うが、一方でいわゆる一人っ子政策で男の子として生まれた兄や弟のコメントがあまりなく、どんな感情を持っているのか気になった。逆の立場からの葛藤もあるのではないかと思ったが、そういったコメントが出てこなかったので、もし何か理由などがあるようなら伺いたい。

○　ハイクオリティで感動的なヒューマンストーリーだった。モニター報告にクロアチアの男性視聴者から「感動した」というコメントがあったが、家族の絆という普遍的なストーリーが海外視聴者にも伝わったのではないか。中国、アジアの話を世界に伝えるＮＨＫならではの番組だった。以前に視聴した香港の民主化デモに参加した若者たちのその後の番組を思い出し、その番組と同様に、ＮＨＫのアジアにおける取材力が見えた番組だ。取材対象の家族に深く入り込んだ取材ができており、規制の多い中国でどのように取材を進めたのか。

テーマの取り上げ方がよかった。中国の問題となると米中対立や国際政治が多いが、中国国内の問題を、ヒューマンストーリーを通して、照射した点がよかった。今中国では、一人っ子政策の歪みの結果、少子高齢化が日本よりも早く進んでいるという。そうした中国のことを考えるきっかけにもなった。中国の問題は、世界に影響がある問題なので、国内にもきちんと目を向けるように、というメッセージにつながったのではないか。

○　一人っ子政策や国際養子縁組制度などについて、知らないことが多かったので大変興味深く、また痛みを感じながら視聴した。本当にすばらしい番組だった。養子に出された子どもと養子に出した両親の双方の視点と体験、彼らの思いが具体例を通して紹介されていて、中国政府による一人っ子政策の過酷さ、残酷さを非常に浮き彫りにしていると感じた。その意味で、一人っ子政策について、中国の一般市民の側から光を当て、当事者のその後の人生を描いた大変貴重なドキュメンタリーだと思った。特に番組の最後、グレイスさんが両親と別れる際に、恐らく大変貧しい家庭にとっては大切なお金を、父が養母のベスさんに手渡した場面は本当に心が痛み、涙腺が崩壊したような状態になってしまった。中国の農村での生活、あるいは男尊女卑の考え方など、いわば近現代の中国社会と文化の一端というものが例示されていて、本当にいろいろと考えさせられた。その一方で、番組に込めた狙いや意図がやや分かりにくいようにも感じた。この番組を制作するに当たっての根本的な問い、込めたメッセージについて教えてほしい。また可能であれば先行して放送された日本語版で、視聴者が制作者の意図をどのように受け取っているのか、関連する情報があれば併せて共有してほしい。

（ＮＨＫ側）　貴重かつ勉強になる鋭いご指摘の数々に感服し、あらためてこの番組を作ってよかったと思った。

この番組はまずＢＳ１スペシャルの５９分の枠で日本語版を放送し、その後、この英語版の国際放送があり、そして１２月９日に４９分のＮＨＫ

スペシャルで放送している。大変多くの反響があり、ＳＮＳやモニター報告を含めて、８割ぐらいの人から「泣いた」「もう涙が止まらなかった」「号泣した」というご意見が寄せられた。番組を制作する際、放送前に試写を何回か行う。これまで私もいろいろな番組の試写を行ってきたが、ディレクターが大泣きをしながら試写をするというのは本当に初めてだった。私も先ほど話に出た、駅で父が 2000 元を出すシーンは、どうにも我慢できず、涙腺が崩壊してしまったことを正直に告白したい。

委員から一番指摘が多かった「情緒的になり過ぎて情報性としてどうなのか」という点について、私も情緒的にすべきとはもちろん思わなかったが、今、日中関係、米中関係も含めて中国という国の情報がどんどん閉ざされている中で、この中国人の素朴な、特に父と母の姿と親子の愛情というものをきちんと描くことが、第一優先だと思った。おそらく、中国人に対して近年よくないイメージを持っている人が一部にいると思うが、決してそうではなく、娘のことを思い 2000 元を出してしまうような、当たり前ながら、われわれと同じ人間であること、あのような人たちが地方に行くとたくさんいるということを描くことを、第一優先にしたいと思った。もちろんご指摘があったように、今回取り上げたのは極めてハッピーエンドのケースで、この問題について本当にこの描き方だけで十分かと言われたら、まだまだメッセージとして出さねばならないことはたくさんあると思っており、制作者として、じくじたる思いがあるところだ。

今の中国でよくこのような映像を撮ることが許された、という点についてだが、今の中国は、ご存じのように日本人で拘束されている人もおり、取材している人間の身の安全、それから当然、出演してくれた人の身の安全を考えると、われわれとしても重々注意して進めた。幸いにして直接当局から現地で取材中に「これ以上やめろ」とか「何をやっているんだ」と注意や警告を受けることもなく、また公安が来たりすることもなかった。現政権、つまり習近平体制自身が始めた政策ではないということも大きいだろうし、基本的にわれわれも今の中国、現政権を批判する意図はない。

また、今の中国は、一人っ子政策のしわ寄せで男女比が 120 対 100 と大変偏り、悲惨な状況が独身の男性に起きていることも承知している。中国の場合、農村部では嫁をもらう時に男性側が多額の金を払わねばならないという事情もあり、結婚できない男性たちが大量にあふれている現実もあるので、今後、そういったテーマも追っていきたい。

最後に、「功罪のうちの功もあったのではないか」という、つまり人口抑制策としての面からは功もあったのではないかというご意見も、納得感をもって聞いた。ただ、私の最終的な思いとしては、功を否定する以前の話として、人間の生き死にということを国家の意思でコントロールすることは、やはりやってはいけないことではないか。根本的にやはりこれは極めて残酷な話だという印象を持っている。

（ＮＨＫ側）　番組のメッセージ、あるいはなぜアメリカのメディアも取り上げていることをＮＨＫも取り上げたのかという点を補足したい。やはり権力が家族

に介入するということを、内側から個人のレベルで見てきちんと描くことがこの番組の一番の狙いだ。そのためにアジアのメディアとして、欧米のメディアでは捉えきれない部分を取材できることを強みとして取り組んだ。アジアの、特に中国はいろいろな側面があり、この番組だけでは伝え切れない。さまざまな番組で多面的に捉える必要があると思うが、この番組については権力と家族のこと、それが個人でどうなるのかを実地で見るという狙いを持って取り組んだ。

２０２３年 １１月 国際放送番組審議会

２０２３年１１月のＮＨＫ国際放送番組審議会（第７０７回）は２１日（火）ＮＨＫ放送センター（ウェブ会議）で８人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず令和５年地上基幹放送局の再免許にあたっての総務大臣の要請の紹介と、最近の国際放送の動きについて説明があり、意見交換を行った。続いて「２０２４年度国際放送番組編集の基本計画（案）」について説明があり、意見交換を行った。その後、Japan Railway Journal「Minamiaso Railway: Overcoming Disaster」のほか、国際放送一般について意見交換を行った。最後に、国際放送番組のモニターリポートと視聴者意向の報告を行い、会議を終了した。

（出席委員）

委員長	永井　均	（歴史学者、広島市立大学広島平和研究所 教授）
副委員長	阪田　恭代	（神田外語大学グローバル・リベラルアーツ学部 教授）
委員	髙祖　歩美	（情報・システム研究機構　国立遺伝学研究所 ＮＢＲＰ広報室長）
委員	坂野　晶	（一般社団法人ゼロ・ウェイスト・ジャパン 代表理事）
委員	渋澤　健	（シブサワ・アンド・カンパニー株式会社 代表取締役 コモンズ投信株式会社 取締役会長）
委員	杉山　晋輔	（早稲田大学 特命教授、前駐米大使）
委員	仲本　千津	（社会起業家、㈱ＲＩＣＣＩ ＥＶＥＲＹＤＡＹ 代表取締役ＣＯＯ）
委員	村上由美子	（ＭＰｏｗｅｒ　Ｐａｒｔｎｅｒｓ ゼネラル･パートナー）

（主な発言）

＜最近のＮＨＫおよび国際放送の動きについて＞

○　「NEWSROOM TOKYO」の特集で、内閣広報官の四方敬之氏が出演し、Ｇ７の日本以外の６か国がイスラエル支持の共同声明を発表した件について取り上げていた。よくできた特集だったがやはり公共放送であり、政府の放送ではないので、もう少し掘り下げてもよかったのではないか。ガザ関連の報道は難しいとは思うが、もう少し量と質とスピードがあってもよいのではないか。

（ＮＨＫ側）　ＮＨＫの次期中期経営計画案で「世界に冠たる放送を出していく」、「情報の参照点になる」、あるいは「民主主義の一翼を担う」と掲げており、イスラエルとガザ地区関連の報道でも公共メディア・ＮＨＫとしての役割を果たさなければならないということをあらためて実感した。冷静な判断で中立的な報道が求められていると思うので、ご意見をもとに改めて考えていきたい。

＜２０２４年度国際放送番組編集の基本計画(案)について＞

○　今回の編集の基本方針の中には、日本の視座、魅力、取り組みなどを発信するとあり、賛同する。「日本の視座」といったときに、それが例えば政府の視座であるとすれば１つの重要な視座だが、当然ながらいろいろな視座がある。世代間でも視座が違うのでぜひ意識してほしい。また、細かいことだが、冒頭部分に「長期化するロシアによるウクライナ侵攻や米中対立など」と書かれているが、今のガザ地区とイスラエルのことが全く書かれていない。作成の時期の問題もあったかと思うが、加えたほうがよいのではないか。

○　例えば気候危機や環境に関する側面も含めて、やはり番組の中でどれだけの割合でしっかり扱われているかを、定量的に見守っていくのは非常に重要ではないかと思っている。今、環境関連のコンテンツとして推進している中に、以前、国際放送番組審議会で取り上げられた「Ethical Every Day」や「Zero Waste Life」があるとは思うが、文化的な要素として日本で取り組んでいることを紹介する意味では、まさにこの編集方針のとおりで、とてもよい番組だと思う。一方で、グローバルな文脈から見たとき、本当に危機的な環境の状態に対して、どのように取り組んでいくのかという視点で制作したコンテンツとどう融合させるかが弱いと思っている。国際的に社会の仕組みを動かしていくためのコンテンツのあり様と、文化的に発信として小さなよい粒を拾っていくというコンテンツのあり様の、両方をどのようにしっかりとバランスよく取り上げていくのかが気になっている。

○　今回の編集の基本計画(案)は、次期中期経営計画案を反映して「民主主義の一翼を担う」という表現があるが、それは要するに民主主義の側に立つということで、完全な中立を意味することではない。ロシアのウクライナ侵攻以来、日本は民主主義の側に立って外交を展開しているが、ニュース報道においても日本の視座から、複雑な国際問題を取り上げてほしい。また、「課題への先進的な取り組みを発信する」という部分については、グローバルな放送においてどのような要求があるのか、例があれば紹介してほしい。

国内放送と国際放送の連携はさらに進めていくべきだ。予算削減の中、効率性を求めていく面もあるが、逆に制作の段階から国内放送と国際放送が連携して作ることで、新しい視点の番組が生まれてくる。新たなクリエイティビティーを発揮できる可能性があるという意味でポジティブに捉えることができる。

最後に、ホームページについてだが、より分かりやすいものにしてほしい。外部の動画共有サイトを経由してきた視聴者が、いざホームページにアクセスしたら、分かりづらいというのではもったいない。より使い勝手のよいものにしていってほしい。

○　国際放送として今どのようなコンテンツを伝えるのかよく分かったが、戦略的にＮＨＫワールド　ＪＡＰＡＮとしてコンテンツを届けたい地域や言語、ターゲットとなっている地域や国はあるのかを伺いたい。例えば、インターネットサービスについて「外部プラットフォームを通じた発信の強化で、若年層の認知向上と新規ユーザー開拓につなげる」と書かれているが、その若年層というのは一体どこにいる若年層なの

か。例えば、インドからのアクセスが多いという動画共有サイトはインドにターゲットを置いて情報発信をしていくことにするのか。ＳＮＳはまた違うターゲットを決めていくのか。誰に情報を届けるかという戦略的なターゲットや優先順位があれば、教えてほしい。

（ＮＨＫ側）　いくつか頂いた大変貴重なご意見に、今コメントできる部分について回答させていただく。

「日本の視座といっても、いろいろ多様な立場がある」という指摘については、まさにそのとおりだと思う。われわれも日本政府だけや、ある一定の層の立場に偏らないように、日本の中にもさまざまな視点があることを、これまで以上に意識していきたいと思っている。

編集の基本方針の部分に「ガザ情勢」が入っていないというご指摘だが、どこまで長期化するかを見極めるという意味もあって入れていなかった。かなり長期化しそうな様相になってきたので、再検討させていただく。

気候危機に関しての発信は、ややもすれば個人的な取り組みのほうが取材しやすく、そちらに偏ってしまうところがあるというご指摘はそのとおりだと思う。グローバルな気候変動も気候沸騰と言われる段階になってきており、ＮＨＫスペシャルの英語化などでその問題を発信しているところではあるが、例えば日々のニュースなどの中でも扱えないかなど、より一層、意識していきたい。

それから「民主主義の一翼」とは、ご指摘のとおり民主主義の側に立つというのが基本にあると考えている。その中で日本としてさまざまな立場の相互理解に資するような形での発信ができないか、日本の視座は何かということをあらためて、通年で常に意識し、突き詰めていきたい。

世界共通の課題については、例えば、高齢化社会やＳＤＧｓ一般だ。特に意外なほどアクセスが伸びているのは高齢化社会の医療や生活の質に関する日本の取り組みを扱った番組だ。例えば「Medical Frontiers」という番組で骨粗しょう症について取り上げたエピソードが長期のヒットになっている。そのようなところでも世界の公共に資するような発信をしていきたい。

そして、効率性ということで、国内放送に逆に新たなクリエイティビティーの刺激を与えられるのではないかというご指摘はまさにそのとおりだ。今回、「Women on the Front Line」の日本語版「立つ女たち　～女性議員１５％の国で」が「地方の時代」映像祭でグランプリを受賞した。この番組は、制作当初から世界を意識し、ノーナレーションの演出方法で、日本の政治について馴染みのない海外の人にも分かるような、平易なことばで丁寧な説明を加えた。それが国内で政治、特に地方政治に関心がない、選挙に行かない、そういった人たちにも分かりやすい作りにつながり、そのような役割を少し果たせたのではないかと感じている。

ホームページについても現在、鋭意リニューアル作業中なので、期待していてほしい。

最後に、ターゲットとしている地域についてだが、私どもはさまざまな

調査をし、そこでの関心や実際のアクセスなどから判断して、北米とアジアを２大ターゲットとしている。ご指摘のとおり、今インドをはじめ南アジアからのアクセスが非常に伸びていてポテンシャルのある地域だと思っており、インドを中心とする南アジアを意識したコンテンツも、これから強化していきたいと考えている。

（ＮＨＫ側）　放送法では「放送が健全な民主主義の発達に資するようにすること」を掲げている。その立場で日本のメディアとして考え、伝えていくことが「日本の視座」であると考えているが、指摘があったとおり、さまざまな考え方があると思うので、きちんと意識しながら取り組んでいきたい。

先日ソウルでＡＢＵ(アジア太平洋放送連合)の総会が開かれ出席してきたが、災害や気候変動が以前にも増して各国の主要な課題になっていることをつくづく感じた。災害が多い課題先進国として、日本で得られている知見もたくさんある。そういったものを気候変動を克服する枠組みの中で発信していくことも、この計画案に込めたつもりだが、より大きな視点でご意見をいただいたので、反映させていきたい。

＜ Japan Railway Journal「Minamiaso Railway: Overcoming Disaster」
（９月１４日（木）２３:３０ ほか）のほか、国際放送一般について＞

○　今、局長からこの番組は、国土交通省の表彰制度である「日本鉄道賞」の特別賞を受賞したとの説明があり、大変うれしいニュースだ。心から祝意を表したい。番組を見て、やはりローカルコミュニティーや観光、地震災害からの復興そして鉄道、特に鉄道ファンには、たまらなくよい番組だろうと思った。映像もきれいだったので、受賞したのにはきちんと理由があるのだと今、納得した。しかし、私が鉄道に詳しくないということもあるのか、確かにきれいで復興や地震、観光そしてローカルコミュニティーのよさは伝わるが、全体として、鉄道ファンにアピールしているものの、日本が海外視聴者に向けて、阿蘇は風景がきれいな所なので、皆さんに来てほしいという以上のものを感じなかった。制作者は海外のどのような視聴者をターゲットにしたのか。復興に向かうところは大変象徴的だと思ったが、少しそのような感じを受けた。

○　鉄道ファンにとって南阿蘇鉄道の復活は感動的であることが非常によく分かった。しかし、海外の人たちを対象とする番組と考えると「鉄道ファン」や、いわゆる「鉄っちゃん」といった言葉が外国語にあるのだろうか。また、南阿蘇がどこにあるか、地図は短く表示されたが、分かりにくかった。そもそも熊本で地震があり大きな被害があったということも知らない人が多いのではないか。後半に説明はあったが、番組の冒頭から熊本地震の経緯や鉄道が復興することの意味などをフレームとして説明すれば、より外国人にも理解してもらえたのではないか。また第三セクターということばも使われていたが、これも日本的なものだ。そのまま英語にしてしまうと、見ている人たちは意味が分からないだろうと思う箇所もいくつかあったので、次回は、ぜひそのあたりを工夫してほしい。

○　アメリカ人とこの番組を見た。映像が美しく、「こんなに緑も美しいところへ行ってみたい」という感想だったが、同時に「この番組は何をメッセージとして伝えたいのかが明確ではない」とも言っていた。番組は外国人を視聴者に定め、しっかりフォーカスした上で作っていると考えると、メッセージ性が少し明確ではなく、また内容も映像の美しさ以外の部分に関しては、よほど鉄道のファンでなければ、あまり魅力を感じなかったのではないか。私は日本人として、本当に厳しい復興を地元のコミュニティーの人たちが力を合わせて進めていったことに対し、「よく頑張った」という応援、エールのような気持ちもあり、もう少しポジティブに見られたが、おそらく外国人は、そうした応援やエールの気持ちはあまり感じないだろう。今回制作した人たちの意図を、外国人に対してどのようなメッセージをつたえたかったのかを伺いたい。

○　地震からの復興ということで、復興から明けていくコメントと長いトンネルから抜けていく映像が掛け合わさるなど、映像が美しく、鉄道ファンだけではなく地元の人も含め、皆さんが本当に待ち望んでいたことだったのだということが伝わるよい番組だったと感じた。一方で、やはりいくつか私も疑問に思うところがあった。まず地図がよく分からなかった。九州、日本の地図が表示され、その後、一瞬でズームインされてしまい「南阿蘇は一体どこにあるのだろう」と疑問に思った。私は鉄道にあまり興味がなかったので、風景など似た印象で繰り返しているような感覚があった。例えば、途中下車しながら、その土地のおいしい名物料理や民芸などに触れる。そういったものも紹介しながらであれば、鉄道ファンだけでなくほかの人たちにも興味深いものになるのではないかという印象を持った。

○　残念ながら、私も個人的にはあまり鉄道が趣味ではないが、海外でも鉄道ファンがたくさんいることは承知しているので、そうした人たちは深く心を打たれているであろうと思って見た。また、鉄道ファンに加え「日本のこのようなところもよい」と紹介していると考えるならよい番組だと思う。特にキーワードとして「Creative reconstruction（創造的復興）」というのが出てきたのはおもしろいと思っている。日本の災害復興の事例として、せっかくなのでそこはもう少し掘り下げてもよかったのではないかと強く思った。例えば「日本政府がこういった施策を打ったのが、この事例が初めてだ」というような紹介があったと思うが、あの仕組みを作るに当たって地域の人がどのように貢献したのかなどが、もう少しストーリーとして見えてきたらよかったのではないか。国と自治体そして市民がそれぞれどのような役割を果たしたのか、もう少し詳細に伝えてもよかったのではないか。また、番組の中盤でコメンテーターが登場する構成になっていたのが、すこし唐突なところがあり、別番組かと一瞬思ってしまった。彼らが切り替えの役割を果たしているのだと思うが、感想を述べるだけになっているところがもったいないと感じた。彼らから補足的な情報を発信するなど、解説的な役割があってもよいのではないか。

○　「Japan Railway Journal」が旅や鉄道の情報番組なのか、それともももう少し違う番組なのか、見ていて分からなくなったところが正直あった。旅や鉄道の情報番組とすれば理解できたが、一方で「７年という歳月を要した苦難の道のりがあり、それを乗り越えた」と番組の冒頭でコメントされており、南阿蘇の復興に７年という歳月を要

したという点がポイントだと期待をした分、苦難の道のりが少しあっさりしていたと感じた。情報番組なので当たり前かもしれないが、どちらかというと事実ベース、ファクトベースで、「このようなことをした」「こういった駅を作った」という流れになってしまった分、復興へ向けての苦難や要した歳月の印象が弱かった。もしそこがポイントだったのであれば、苦難の描写がもっとあったらよかったのではないか。例えばトロッコ列車に乗った人の感想なども、７年間とても待ち望んでいた家族や人がいて、その人たちが「ようやく乗れた」というコメントがあれば、また印象も変わるのではないか。

○　「Japan Railway Journal」は 2015 年から始まっている番組でファンが多いのだろう。しかし、今回の南阿蘇のエピソードは、誰をターゲットにしたいのかが分かりにくかった。鉄道ファンなのか、一般視聴者や観光客なのか。まず、エピソードのなかに様々な要素が入っていたが、やや盛り沢山だった。地元の復興のストーリー、政府と地元が協力した「Creative reconstruction(創造的復興)」、日本の電車車両の最新の技術といったハード面、ソフト面にも配慮した人に優しい鉄道、観光を促す場面など。番組の真ん中ではなく、冒頭でまずナビゲーターを使って、手短に番組の流れを紹介した方が見やすかった。２つ目は、２８分のうち最初の１５分ぐらいが復興の話だったが、逆に最初に復興後の新しい技術の紹介をしたほうがグローバルな関心、一般視聴者の関心を引くことができたのではないか。３つ目は、話が淡々と進められたところがもったいなかった。例えば、ストーリーの案内人として、デジタルアイコンやキャラクターなどを作り、視聴者を誘導していった方が番組を身近に感じることができたのではないか。鉄道ファンでなくても共感できたのではないか。とてもよい素材だったので少々構成が分かりにくかったという点で残念だった。さらなる取り組みを期待したい。

○　とにかく映像が美しかったことが印象的で、ナレーションも聞きやすく、音楽も軽快な感じで鉄道番組としてとても魅力的だと思った。コメンテーターの工学院大学高木亮教授の解説もかなり分かりやすかった。いきなり途中で登場されたので、少々戸惑ったが、このようなパターンを何回か繰り返す構成なのだと理解した。トロッコ列車や新型車両などの映像が鉄道愛好家たちを魅了するだけでなく、震災によるいわばピンチをチャンスに変えた被災地域の１つの成功例として捉えることもできるだろうと思った。また鉄道と社会や、地域社会における鉄道の役割を考える上でも示唆に富む番組だったのではないか。その一方で、いわゆる南鉄の復旧の費用が７０億円とも言われる中、７年という歳月をかけて復旧が実現できたのは、そもそもなぜなのかという部分に、素朴な疑問を抱く海外の視聴者は少なくないのではないか。南鉄の再建プロセスというのは、いわゆる「創造的復興」として１つのモデルケースにもなり得ると思う。その意味で将来、今回の番組とは違った切り口で南鉄が廃線を免れて存続できた理由や構造的な要因、あるいは復旧プロセスにおける政府と自治体、熊本県や南阿蘇村、そして南鉄という鉄道会社など、官民あるいは地元住民の間での議論など、その背後にある人間ドラマに光を当てた別の番組も見てみたいと思った。

（ＮＨＫ側）　この番組は８年ほど前から続いている番組で、モニター報告を読むと日

本の鉄道にこれだけ関心を持っている人が海外にいるのかとかなり驚く。日本人が思っている以上に海外での日本の鉄道に対する関心は高く、そういった人たちがこの番組の長年のファンになっているということを、担当になって初めて知った。主にそうした人たちに向けて発信しており、同時に鉄道から見えてくる日本というものを伝えている番組だと考えている。「どのようなメッセージが今回の番組にはあるのか」という質問だが、やはり「復興」が大きなテーマだと思う。特に近年は災害にあった鉄道が復旧できずに廃線となり、コミュニティーの崩壊につながるという事例が多くある。そのような中で、地元も官も民も巻き込んで大きく一歩踏み出し、成功しつつある事例として紹介した。いろいろな要素があり、説明がうまく行き届かなかった面もあるので、今後改善をしていきたい。今回の番組も海外モニターの評判はなかなかよい。モニターは、ＮＨＫの国際放送を積極的に見てくれている人で、多少偏りはあると思うが、全体評価はほとんど満点だ。やはり「鉄道を支えている地元の人の熱意に感動した」という意見、あるいは自分の国と比較している人もいて、例えばアメリカの人がハワイなどの火事の話と比較をしていたり、ルーマニアの人で「自分の国ではこのような復興は難しいのではないか」という意見もあった。最後の観光情報にも反応があり、「次に九州に行ったときは絶対に行きたい」というアジアの人の意見もあった。

（ＮＨＫ側）　ターゲットについては、ご指摘のとおり、海外の鉄道好きの人を念頭に置いている。海外でも鉄道ファンは多く、イギリスには日本の鉄道を愛する会という 300 人ぐらいの会員がいる会があり、２年に１回、鉄道に乗りに日本へ来たりしている。ヨーロッパは大変鉄道ファンの人が多く、アジアも台湾やシンガポールなどで視聴者が多い。一昨年、バスを改造してレールと道路の両方を走れる車両を紹介した時は、インドのアクセスが爆発的に増えた。恐らく鉄道の技術的な部分に関心のある国なのだと思う。また視聴者の３割ぐらいはアメリカの人なので、アメリカ、アジア、イギリスを中心とするヨーロッパを念頭に鉄道に関心のある人をターゲットにして作っている。今回の南阿蘇の場合は７年の復旧が実現したということで、それをきっかけに取り上げたが、鉄道を軸に作ったため、メッセージ性が弱いというのはご指摘のとおりだ。どのように掘り下げていくかは今後のテーマだと思う。またスタジオシーンが唐突に思えるというご意見については、確かに日本の番組を見慣れていると、挨拶もなく突然話し出すのはあまりないパターンだ。ただ実は、ネットを通じたアクセスの視聴分析を継続的にしており、それによれば、冒頭のスタジオシーンで見る人が大幅に減る。ＶＴＲの間は見続けてもらえるが、スタジオが入るたびに見る人が大きく減っていくので、試しにいきなりＶＴＲで本題に入り、１０分くらいたったところで解説を加えるというスタイルにした。もう１年半以上たつが、この形でアクセスも多くなっているので、海外の人にはこれがよいのかと制作している。しかし、ご指摘のとおり、突然出てきて解説というのは、唐突な感じもあり、挨拶ぐらいしたほうがよいのではないか

と思っている。試行錯誤でいろいろなパターンを試していきたい。それから、７年の復興がいかに成し遂げられたのかというテーマであれば、恐らく５０分ぐらいの特集番組が制作できると思うが、なかなか「Japan Railway Journal」のスタイルの中では難しいと感じている。ご意見をいただいた番組のメッセージのことなど試行錯誤しながら改善し、鉄道ファン以外の人にも楽しんでもらえる番組になるよう努力したい。

２０２３年 １０月 国際放送番組審議会

２０２３年１０月のＮＨＫ国際放送番組審議会（第７０６回）は１７日（火）ＮＨＫ放送センター（ウェブ会議）で９人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず最近のＮＨＫの動きについて、続いて最近の国際放送の動きについて説明があり、意見交換を行った。引き続き、「NHK WORLD PRIME」On the Frontlines of Myanmar's Civil War、「HELLO！ NHK WORLD−JAPAN」について説明があり、意見交換を行った。最後に、国際放送番組の放送番組モニターと視聴者意向の報告を行い、会議を終了した。

（出席委員）

委員長	永井　均	（歴史学者、広島市立大学広島平和研究所 教授）
副委員長	阪田　恭代	（神田外語大学グローバル・リベラルアーツ学部 教授）
委　員	遠藤　乾	（国際政治学者、東京大学大学院法学政治学研究科 教授）
委　員	髙祖　歩美	（情報・システム研究機構　国立遺伝学研究所 ＮＢＲＰ広報室長）
委　員	坂野　晶	（一般社団法人ゼロ・ウェイスト・ジャパン 代表理事）
委　員	渋澤　健	（シブサワ・アンド・カンパニー株式会社 代表取締役 コモンズ投信株式会社 取締役会長）
委　員	杉山　晋輔	（早稲田大学 特命教授、前駐米大使）
委　員	仲本　千津	（社会起業家、㈱ＲＩＣＣＩ ＥＶＥＲＹＤＡＹ 代表取締役ＣＯＯ）
委　員	村上由美子	（ＭＰｏｗｅｒ　Ｐａｒｔｎｅｒｓ ゼネラル･パートナー）

（主な発言）

＜最近のＮＨＫの動きについて＞

○　2024 年から 2026 年までのＮＨＫ次期中期経営計画案は、これから本当にＮＨＫを変革していくと思える内容だった。民主主義を守るという理念も今まで以上に明瞭に出ており、情報発信の形についても、デジタルと地上波の融合や国際と国内の融合について、建設中の情報棟も稼働させてソフト面ハード面で進めていくということがよく理解できた。

（ＮＨＫ側）　大変大事な３年間であり、ＮＨＫがメディアとして国内外で必要とされるように頑張っていきたい。皆さまからも引き続き、問題点の指摘などをしていただけたらと思う。

＜最近の国際放送の動きについて＞

○　ＮＨＫワールド　ＪＡＰＡＮ公式ＳＮＳのフォロワーが 300 万人を突破したことに 400 件以上のコメントが寄せられたことについて、概してポジティブな意見が紹介されていたが、「今後このようなところを変えてほしい」という意見があれば改善につなげられるのではないか。

（ＮＨＫ側）　現在寄せられたコメントを取りまとめて、どのような声があるのか分析を行っている。おっしゃるようにわれわれの参考になるような、ある種ネガティブなものもぜひ取り入れていきたいと思っている。

○　ＳＮＳのフォロワーは、性別、年齢層を見ると２０代後半から４０代前半となっているが、テレビをよく見る世代に偏りがあると感じる。ＮＨＫ次期中期経営計画案では、放送やインターネットの展開を考える上で、こうした各世代の違いに対し、どのようなビジョンを持っているのか。

（ＮＨＫ側）　まず国内と海外では事情が異なると考えている。ＮＨＫのインターネットサービス全体を今、再構築しようとする中で、若い世代にも当然リーチしていかなければいけないと考えている。海外ではＯＴＴの存在がますます大きくなっており、インターネットを活用してアプローチすることも考えていかなければいけないと思う。

○　民主主義の基盤となるには、やはりさまざまな意見を述べられる場を作ることが１つの役割だと思う。例えばＢＢＣやＣＮＮでよく見かける、英語での討論番組やインタビュー番組などの番組はＮＨＫワールド　ＪＡＰＡＮにはあるのか。

（ＮＨＫ側）　討論番組は「GLOBAL　AGENDA」という番組があり、インタビュー番組については「Direct　Talk」という番組がある。「GLOBAL　AGENDA」は１時間近い番組なので、スピードが速い今の時代に合わせ、番組のサマリーを出すなど工夫し、視聴者層を広げたいと思っている。「Direct　Talk」もイノベーションに関わっている人や多様性に関わっている人など、若い層にも響くような人を取り上げている。番組の存在自体をもっと知ってもらう必要があると感じているところだ。

○　例えば、そのような番組を音声だけのポッドキャストのような形で情報発信することはやっているのか。

（ＮＨＫ側）　ポッドキャストはいくつか今、立ち上げている。「Direct　Talk」もポッドキャスト用のコンテンツを制作している。

○　ソーシャルメディアといっても、普及している数や地域、世代もさまざまなものがある。何を使っていくべきかなどの分析を行っていたら教えてほしい。

（ＮＨＫ側）　まさにどのプラットフォームに、どういった優先順位で力を入れていくかは常に気にかけている。一般的に中高年の利用者が多いというＳＮＳでも、我々のフォロワーは２０代から４０代の若い層が中心で、投稿コメントも温かく、“ＮＨＫワールドコミュニティー”のようなものができている。
　一方で、今有効と考えるのは動画共有サイトだ。例えばＢＢＣなどのドキュメンタリー好きの人におすすめ動画としてＮＨＫワールド　ＪＡＰＡＮの番組があがって視聴につながる、という全く違う流入でこれまで届かなかった層にタッチポイントを広げることができている。プラットフォームはほかにもさまざまあり、若者向けのものなどの研究も続けていきたい。

（ＮＨＫ側）　それぞれのプラットフォームに特性があるので、それに合わせた戦略をしっかりと練って最適化した適正な投稿を行い、できるだけ多くの人にＮＨＫワールド　ＪＡＰＡＮのことを知ってもらいたい。引き続きいろいろご助言いただきたい。

＜「NHK WORLD PRIME」On the Frontlines of Myanmar’s Civil War
（9月２３日（土）１０:１０ ほか）
「HELLO！ NHK WORLD−JAPAN」
日本語学習サイトリニューアル　（4月９日（日）総合 ２２:４５ ほか）
在留・訪日外国人向け災害情報サービス　（9月３日（日）総合 ２２:４５ ほか）
について＞

○　まずミャンマーの番組だが、映像も報道も「これぞ現場」という真に迫るものがあり、感銘を受けて拝見した。ＰＤＦ（国民防衛隊）の視点が全面的に出ているが、これこそジャーナリズムが行える、また行うべき素晴らしい内容だ。民主主義が破綻したときに、軍事政権が台頭するケースが他国でもあり、そこに問題の本質があると思う。軍事政権に反対するのは主張として分かりやすいが、それだけではミャンマーは変わらない。その点まで踏み込みたいが、５０分の番組でそこまで取り上げるのは難しいだろう。番組全体としてよくできていた。質問としては、この映像をどのように撮影し、ヤンゴンの軍事政権との関係でどのように行ったのか。被写体の人たちのセキュリティーにかなり配慮したと思うが、可能な範囲で説明してほしい。また、海外放送だけではもったいないので、日本国内でも放送しないのか伺いたい。
　「HELLO！ NHK WORLD−JAPAN」については、こんなすばらしい日本語学習サイトがあることを知らなかった。在留・訪日外国人向け災害情報サービスも、よくできているので、日本国内でもっと宣伝してもらいたい。

○　「On the Frontlines of Myanmar’s Civil War」について、かなり踏み込んだ報道の取り組みで感心した。国境を超えてゲリラ戦になっている地域までカメラが入ってお

り、取材クルーの命の危険もありながら、ギリギリのところで撮影したのではないか。また、番組全体のメッセージとして軍事政権に対する批判や反対が伝わってくるが、ジャーナリズムとして事実を忠実かつ冷静に伝えるところに軸を持っており、番組の質の高さ、評価につながっていると感じた。

その上で、特にアメリカ、欧州諸国などは、かなり強硬に軍事政権に反対の姿勢を見せているが、日本政府のアプローチは、和解の可能性を探る上でも比較的中立的な立場を取っている。そうした日本の立ち位置がＮＨＫの報道、ほかの西側のメディアよりも踏み込んだ報道をしやすくしているのか。

○　ミャンマーの番組は、生の声を伝え、現場の動きが五感を使って感じられる、引きつけられる内容だった。ミャンマー情勢はニュースなどでマクロ的な視点から語られがちだが、ミクロな市民の視点で情報を得られ、貴重だった。一方で、軍部によるクーデターに対して市民の抗議活動やデモなどが起こった、と記憶していたが、内戦状態にまで深刻化していることに驚いた。軍事クーデターから内戦に至るまでのこの２年間、どのようなことが起きていたのか番組内でも簡単に触れていたが、市民が立ち上がるきっかけや背景などもう少し丁寧に紹介したら、よりよい内容になったのではないか。

「HELLO！ NHK WORLD－JAPAN」の「日本語学習サイトリニューアル」について、このコンテンツも本当にすばらしい内容で、在留外国人の人たちには貴重な情報なのではないか。それが２０の言語に対応しているというところで、誰も取り残さず、皆に平等に情報を提供したいというＮＨＫワールド ＪＡＰＡＮの制作者たちの気持ちと気概が感じられる取り組みだ。ＵＩの話になるが、実際に私も携帯を使って、そのコンテンツを見てみたところ、ランディングページなどに色が多いと感じた。「ここをぜひ見てほしい」というところに色を付け、それ以外はブラック＆ホワイトにするなど強弱を付けると、よりよいサイトになるのではないか。

○　ミャンマーのドキュメントは、現地の声、しかも思いもよらない場面にまでしっかり映像で迫っていて、得るものが多かった。ここまで取材できていることに驚くと同時に、視聴者としてはトップシークレットと言いながら放送して大丈夫なのか気になった。なぜ今回放送できたのか、番組の中で解説があってもよかったのではないか。ドキュメンタリーの構成として今回、比較的イントロが長かった印象がある。また、私はアジアの人の話す英語に慣れているほうだと思うが、分かりづらいところがあり、せっかくのインタビューがもったいないと感じる部分があった。ノンネイティブの英語について配慮検討していることがあれば伺いたい。

「日本語学習サイトリニューアル」については、これもまさにぜひＳＮＳで発信してほしい。言語の中にハングルがないのが少々気になった。日本国内において朝鮮学校などで、このコンテンツを知ってもらえると、今後ＮＨＫワールド ＪＡＰＡＮに理解を深めるよいチャネルになるのではないか。その意図や、もし何か検討していることがあれば伺いたい。

○　「On the Frontlines of Myanmar's Civil War」だが、登場した兵士たちやジャーナリストは、ちょうど自分の息子たちと同じ年齢でさまざまに考えさせられる重い内容

だった。このところウクライナなどに意識が向いていたので、このようなことが、直近なアジアのミャンマーで起こっていることに発見や驚きがあった。これは国際放送独自のコンテンツだと理解したが、もっと大勢の人に見てほしいと思う。国内放送でも放送しているのか。また、海外のメディアでも放送できる協定のようなものはあるのか。

○　長く続く内戦などは、始まった際は広く報道されるが、日々さまざまな事件が起こる中で記憶が薄れがちになる。特に今回はアジアで起きている内戦であり、アジアの報道機関が取り上げなければなかなか報道され得ないことを伝えていくことは重要で意義があると感じた。一方で、この番組が焦点を当てているのは、ミャンマーの内戦を伝えるジャーナリストなのか、軍に立ち向かう若者の様子なのか、という疑問が最後まで少し残った。

日本語学習サイトや災害情報については、海外からの留学生にとってこのような情報やサービスはとても有益なコンテンツだ。英語を共通言語として授業も英語で行われる場合もあり、留学生は日本語に堪能とは限らない。自主学習できるコンテンツとして役立つと感じた。また、さまざまな言語で発信される災害情報サービスも貴重な情報源になると思う。一方で、ＮＨＫの日本語放送を留学生が視聴している可能性は低いので、日本語学習サイトのリニューアルや災害情報サービスについて、今回日本国内での放送の意味は何か、疑問が残った。誰に届くことを目的として放送したのかということがあれば教えてほしい。

○　最初の「On the Frontlines of Myanmar's Civil War」について、ウクライナ侵攻開始の１年前にミャンマーで起きた本当に悲惨なクーデターで、これを取り上げたことはその意気込みも含めてすばらしく、感銘を受けた。その上で、少々５０分は長いというのが最初に見た印象だ。一番気になったのは、日本についてほとんど出てこないことだ。日本とミャンマー政府には特別なつながりがあるといわれ、累積の援助額も大変大きい。今まで蓄積で出してきたお金が国軍にどのように利用されているのか、されていないのか。こういったことについての内省的な内容が全くないまま済むのかどうか。全体として番組を高く評価をしているが、この点は気になった。

「ＨＥＬＬＯ！　ＮＨＫ　ＷＯＲＬＤ－ＪＡＰＡＮ」について、これはすばらしい。日本語学習サイトは、もっと広めるべきであり、こちらの番組はもう少し長くてもよかったのではないか。例えば日本語教育の専門家でなくても、教えられる具体例がさらに２、３例ほど出てくると、もっと具体的に「使ってみよう」という気持ちにつながるのではないか。災害情報サービスもすばらしい。ＡＩ翻訳ができるなら中国語などにも広げられないのか。

○　まずミャンマーの番組だが、インパクトある内容で制作者に拍手を送りたい。アジアの国際公共メディアとして、アジアの民主主義の問題を取り上げ、忘れられがちなことに再びスポットライトを当てたことに意味がある。男女のジャーナリスト、８８世代の人と若い人たち、など、ジャーナリストとして戦う３つの例が挙げられていたが、さまざまな角度からアプローチする内容で、適切な選択と組み合わせだった。

改善点としては、この問題の背景や視点をもう少し説明したほうがよいのではない

か、ということだ。取材したＰＤＦと、ＰＤＦと一緒に動いている人たちの立ち位置がやや曖昧だった。軍事政権に対し、ＮＵＧ（国民統一政府）とＰＤＦが連携して戦っている状態なので、彼らの置かれた現状を評価分析する意味で背景をもっと説明したほうがよかったのではないか。そして、この番組以外にも、日本政府の取り組み、あるいは軍事政権の行いをもう少しクリティカルに報道し、日本の報道機関としてバランスよく海外の視聴者に伝えていくことが大事だと考える。また日本にはミャンマー人コミュニティーがあることも伝えるとミャンマーの問題への日本の関わりについての理解が海外でも深まるのではないか。

「HELLO！ NHK WORLD－JAPAN」は、とてもすばらしく、多言語放送の取り組みが深化していることを表している。日本語教育は、政府が発表した共生社会ロードマップに合致するもので、コミュニティーとして外国人と関わり、専門家でない人も教える側になって関わっていく。その方法を可視化した大事な取り組みで、さらに強化すべきである。災害についてもデジタル化が進んでいることがわかった。ただし、ほかの委員が指摘したように、韓国語がなかったのが気になった。また、多言語メディア部から９月に放送した日越外交関係樹立５０周年ラジオ特番でベトナム国営ラジオの協力を得たとあり、国内のベトナム人コミュニティーなどともっと連携して、災害放送や日本語教育の番組の存在を伝えていくのも効果的ではないか。

○　ミャンマーの番組について、2021年２月の国軍によるクーデター以後、内戦状態になったミャンマーの状況を民主派勢力の視点から、これだけ生々しく伝えたドキュメンタリーを見たことがなく、衝撃を受けた。わけてもロシアのウクライナ侵攻や、現在のイスラエル・ガザ情勢などに世界の注目が集まっている現在、アジアでも悲劇が続いていることをあらためて知らせた意義は大きい。アジア情勢の報道を重視するＮＨＫならではの作品として、以下の点で高く評価したい。まず、ミャンマー人自らによる記録の貴重さだ。死者を担ぎながら前線を離れる兵士、あるいは戦死した若者の葬儀。さらには誕生会や水遊びの儀式ではしゃぐ、いかにも若者らしい姿というものを活写した場面など、同胞のミャンマー人だからこそ残せた内戦の内側の記録だと思った。そしてこの番組自体が歴史の記録、あるいは将来あり得べき戦争犯罪訴追の証拠の１つになっているのではないか。記録者たちが自分の命と引き換えにミャンマー内戦の実態を伝え、アーカイブとして、あるいは国軍が市民に加えた暴力、戦争犯罪の証拠、エビデンスとして映像や写真を撮り続けていると感じた。なお、ミャンマーでの虐殺事件は現時点ではまだオランダ・ハーグのＩＣＣ（国際刑事裁判所）の訴追事案にはなっていないようだ。

次に「HELLO！ NHK WORLD－JAPAN」について便利になっているとあらためて感じた。在留外国人向けの災害情報のサービスはいいサイトだ。紹介されていた、「Japan Life Guide」も非常に在留外国人にとって有用と感じた。このガイドブックはＮＨＫのホームページからダウンロードできるとあったが、紙媒体でも欲しい。どこで入手できるのか。例えば入国管理局などに備え付けられているのか。この点についてご教示いただきたい。

（ＮＨＫ側）　まず、番組の取材体制について、ミャンマー国内に越境して撮っている映像は、ミャンマー人ジャーナリストたちが独自に撮っているものだ。

ＮＨＫ側の撮影は、インドネシアを拠点にしている外部日本人ディレクターによるタイ国内の取材だけで、危険を冒してはいない。彼は、ＮＨＫとの仕事は長くやっており、クーデターの前の経済がよい時代からミャンマーに取材に通い、関係を築いてきた。その中でこの映像の存在が分かり、今回の番組につながった。背景説明については、制作の過程で議論したが、情報が少ないことを自覚しながら、今回はミャンマー人たち自らが命を賭して撮ってきた映像をきちんと伝えることを使命と考え、現場の映像の勢い、臨場感や生々しさを優先した。トップシークレットといいながら放送して大丈夫かとの懸念だが、彼らも自分たちの活動を伝えたいという思いがあり、そのせめぎ合いの中で、所在場所を言わないなど、彼らが許容できる範囲で伝えた。ジャーナリストと若者とどっちに焦点を当てているのかについては、番組の構造上少々微妙なところはあるが、「伝え続ける」ことが軍事政権に対する対抗する手段の一つになっていくのではないかというのが番組のメッセージ、作り手の思いだ。一方で、今回ＰＤＦ側からの視点で伝えており、一方的な主張にならないように客観的な情報をベースに伝えることを検討した。日本の政府や日本の視点をどのように入れていくかも非常に難しい。おそらくもう少し取材をして材料も持った上で、この番組とは別の形にしたほうが伝わると思う。ミャンマーのことはこれからも伝え続けていきたいので、今後の糧にしたい。

国内での放送については、まず、今回の番組の放送前にＢＳ１の「国際報道２０２３」というニュース番組の中で、短いリポートとして放送している。今回の番組自体も、ＢＳ１での放送に向けて、現在日本語化を進めている。海外メディアと映像を共有する仕組みは特になく、ＮＨＫで放送することを目的に映像を使用している。英語の分かりづらさはこの番組に限らず、いつも悩むところだ。英語に英語の字幕をつけることは難しいので、基本的には英語のまま放送することを優先している。

（ＮＨＫ側）　「HELLO！ NHK WORLD−JAPAN」について、まず、日本語学習サイトは、番組内でも紹介したように、今、学生や一般の人でもボランティアで日本語を教える人が増えており、今回のサイトのリニューアルも教える人向けのガイドを充実させた。ボランティアなどでの活用を呼びかけ、またそうした人を通して外国人の学習者にも知ってもらえたらと、国内に向けての周知として取り上げた。

災害情報サービスも同様に、日本国内で在留・訪日外国人に関わる日本人にまず知ってもらい、そこから外国人にも情報が伝わっていけば、と取り上げた。また、災害情報サービスは、ＮＨＫワールド ＪＡＰＡＮアプリの地震と津波のプッシュ通知が現状では４つの言語のサービスになっていることを紹介したが、後半では、パソコンやアプリでも見られる、２４時間のライブストリーミングサービスのＡＩによる自動字幕について現在９つの言語に対応していることを紹介した。情報がたくさんあったので印象が薄かったのかもしれない。

（ＮＨＫ側）　日本国内にもっとＰＲしたほうがよいという意見について、「公共メディア通信」というＮＨＫの国内放送のスポット枠のために１分と３０秒のスポットをそれぞれ作った。また、総合テレビで全国に放送するだけでなく、そのスポットを各地域局に配り、地域のローカル放送枠の中でも「どこか時間を見て出してください」という形で、放送してもらうようにした。同時に英語ナレーションを付けた英語版も作り、ＮＨＫワールド ＪＡＰＡＮでも放送している。

（ＮＨＫ側）　少し補足したい。まず、日本語学習サイトは日本語の先生が第一義的なターゲットではあるが、在留外国人の人と触れ合う自治体や支援団体、コミュニティーの中で日常接している人にも見てもらい、知り合いに勧めてもらいたいと思っている。また、ＮＨＫが共生社会の実現に向け、公共的な役割の１つとして行っているサービスだと知らせる狙いもある。

それから「Japan Life Guide」については、紙媒体で多数刷って、自治体や留学生の多い大学、最近では宿泊施設など、いろいろな所に配布している。各所から「もっと送ってほしい」というリクエストが来て間に合っていないほどだ。紙媒体は便利なので、そのニーズに応えられるよう、またその存在自体をもっと多くの人に知ってもらえるよう努めたい。最後に言語の数だが、サービスの内容に応じて、優先順位の高い、利用人数の高いところから整備している。ニーズや要望の声を受けて、随時対応言語を検討していきたいと思っている。

２０２３年 9月 国際放送番組審議会

２０２３年９月のＮＨＫ国際放送番組審議会（第７０５回）は１９日（火）ＮＨＫ放送センター（ウェブ会議）で８人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず最近の国際放送の動きについて説明があり、意見交換を行った。引き続き、「DESIGN × STORIES」Active Communities について説明があり、意見交換を行った。最後に、国際放送番組の放送番組モニターと視聴者意向の報告を行い、会議を終了した。

（出席委員）

委員長	永井　均	（歴史学者、広島市立大学広島平和研究所 教授）
副委員長	阪田　恭代	（神田外語大学グローバル・リベラルアーツ学部 教授）
委　員	髙祖　歩美	（情報・システム研究機構　国立遺伝学研究所 ＮＢＲＰ広報室長）
委　員	坂野　晶	（一般社団法人ゼロ・ウェイスト・ジャパン 代表理事）
委　員	杉山　晋輔	（早稲田大学 特命教授、前駐米大使）
委　員	中曽　宏	（㈱大和総研 理事長）
委　員	仲本　千津	（社会起業家、㈱ＲＩＣＣＩ ＥＶＥＲＹＤＡＹ 代表取締役ＣＯＯ）
委　員	村上由美子	（ＭＰｏｗｅｒ　Ｐａｒｔｎｅｒｓ ゼネラル･パートナー）

（主な発言）

＜最近の国際放送の動きについて＞

○　さまざまな活動を評価しているが、東京電力福島第１原発の処理水海洋放出について、ワールドニュースで丁寧に取り上げていたことは、非常に大事なことだ。これから数か月、モニタリングの結果などをつぶさに報道してもらえると、さらに安心・安全な情報が伝わる。処理水の海洋放出は、近隣の韓国、中国のみならず、太平洋諸島の人々も気にかけているという話を専門家から聞いている。影響を受ける国や地域の人々の声を伝え、各地域に情報が伝わるようにしてほしい。

＜「DESIGN × STORIES」Active Communities
（6月２２日（木）１０:３０ ほか）について＞

○　ローカルコミュニティーとの関係を大切にするという点でこの番組の意味は非常に大きく、よくできた番組だと思った。下北沢の建築家ユニット、北区の銭湯、とくにレコードコンビニなどは全く知らなかったので、興味深く拝見した。その上で気にな

ることを述べたい。まず、これが本当に東京や大阪などの大都会の姿をシンボリックに表しているのかという点だ。大都会のほかの地域、あるいは地方に行くと過疎化でシャッター街になっているところもある。３０分弱の番組ですべて伝えるのは無理かもしれないが、その点についても一言あってよかったのではないか。また、国際放送でこのテーマを取り上げたのは、制作者の反語ではないか。海外にこれを伝えると「日本はこのようなことを考えていてすばらしい」という宣伝になるが、国内に向けて本当はそうでもないのではないかということを、メッセージとしたかったのではないかと感じた。

○　コミュニティーの活性化は長らくの課題であるが、なかなか有効な対応も見出すことができずにいる。これまでも不動産開発業者や行政が主導したプロジェクトで、しゃれた建物や、目新しい商品で一時的に集客に成功した事例もあったが、持続可能なものはあまりなかった印象だ。この点、この番組が取り上げた事例は、上物にこだわるわけではなく、むしろ地域の人々のつながりの再生を目指しており、特に若い世代が中心になってアイデアを出し、自主的に行動を起こして成功を収めたという点が共通していて、大変新鮮に映った。ただ、番組の取り上げ方が、淡々と事例紹介が続く感じがして、やや冗長な印象を受けた。もう少し事例間の相違点や共通点が分かるような工夫があれば、なおよかったのではないか。いずれにせよ、このような動きがあちらこちらで起きているのだとすると、大変興味深い。日本のほかの地域でどのくらいこのような事例が起きているのかという点を知りたい。この番組のコンセプトは、「新しい公共空間のデザインの提案」とあり、確かにそのように捉えることもできるが、むしろコロナ禍がもたらした人々の孤独感や断絶感への反作用として起きてきた、１つの社会現象という印象が強かった。これは決して日本だけのことではなく、コロナ禍で孤立感に苛まれたのは、多くの国の人の共通体験だったのだろうと思う。それだけに、日本で起きたこの動きを国際放送の番組で紹介することは意義のあることで、海外からどのような反応があったかを知りたい。気になるのは、このようなプロジェクトが大きな輪になり、それこそ持続的に拡大をしていくのか。あるいは、やはり変化が激しくて移り気な世の中で、一過性のものとして埋没してしまうのか。その辺について、番組の制作者はどのように感じたのかも併せて聞いてみたい。

○　私自身、大変関心がある領域の番組だった。日本でこうした事例の意義は何なのか、ディレクターが伝えたかったことは何か、非常に気になっている。例えば、下北沢で動いている事例はベースとして小田急電鉄が企画をしている。その上で若者が活躍したり、市民が参加したり、その上層部分がうまく映し出されている。そのこと自体すばらしいが、裏側で何か仕掛けがあるからこそできているのではないか。それに対し後半の事例は、まさしく草の根の動きとして、一事業者が取り組んでいる事例という印象を持った。あえて前半と違う成り立ちのものを取り上げているのであれば、“違いがあってもできる”と言いたいのか。逆にこれまでのコミュニティーに対して今必要な要素は何かという提言なのか。番組は心温まる話で終わってすてきな印象ではあったが、もう少しクリティカルな要素も入れたかったのではないかと推測したので、何か意図があったのなら伺いたい。全体の印象としては違うテーマが３つ、いきなり現れた感じがした。番組は下北沢で始まり、途中で北区の銭湯が出てきたときに、これ

も下北沢なのかと少し混乱した。あえてそうしたのなら理由を伺いたい。また、全体的に会話が多い構成でよかったが、リポーターが一人で発するコメントが英語のときと日本語のときが混在していた。英語に統一したほうが、海外の視聴者には理解しやすかったのではないか。

○　非常に楽しませてもらった。日本にこのような形で新しいコミュニティーが出来てきており、公共の場に個人のプライベートな生活空間が広がって、新しいつながり、現代的なつながりが生み出されていることを知るきっかけになった。海外向けの番組だが、日本人にも見てもらえる機会があるとよいのではないか。単なる紹介ではもったいない事例ばかりだったので、コロナ禍で断絶された人とのコミュニケーションやつながりを取り戻すために、どのような人たちがどんな問題意識を持って取り組んできたのか、キャスターとの会話の中で意図が詳しく分かる事例もあったが、番組のナレーションでも補足できたらよかったのではないかと感じた。

○　下北沢パートのナビゲーターを務めたシャウラさんはかなりお腹の大きい妊婦だった。今回は外でのリポートで大変だろうと思いながらも、非常によいことだと思っている。海外だと時折見かけるが、日本のメディアでは妊婦のキャスターやアナウンサーを起用することがなかなか少ない。ぜひ、このような形で、男性、女性はもちろん、年齢や国籍、たまには妊婦といった、多様性のあるキャスター、登場人物が番組に出演するよう極力意識するとよいと思う。今後も、ぜひこのような粋な計らいをお願いしたい。

○　建築や銭湯の復活、ユニークな喫茶店やコンビニといった異なった事例がいくつも出てきて、まちづくりやコミュニティーづくりの取り組み方を紹介する内容を大変興味深く視聴した。アメリカではバーチャルなインターネット上の話だが、自然科学分野の学会でも、コミュニティーづくり、コミュニティー運営がここ数年とても注目されていて、どういったコミュニティーを作るのが効果的か、一般市民を巻き込んで市民科学的なことを行うのかということが話題に上がっている。広く視聴者にも興味関心を持ってもらえるテーマではないかと思う。気になったのは、案内役の人が前半と後半で代わったことだ。同じ人がリポートするほうが、連続性があってよかったのではないか。シャウラさんが妊婦だったので、なかなか一人ではできなかったのか。

○　デザインから社会課題にアプローチしたところが、この番組の意義の１つだ。日本のコミュニティーづくりの新しい潮流、その中の２１世紀的な新しい世代のライフスタイルを取り上げたことに意味がある。その上でさらに２点述べたい。まず、今回の番組紹介の資料に「世界に先駆けて『孤独・孤立の問題』に取り組んでいる日本」とあり、内閣府の「孤独・孤立担当対策室」に言及しているが、政府レベルでは、世界に先駆けて孤独担当大臣を設けたのはイギリスだと理解している。日本政府が率先してこの問題に取り組んでいるという印象があまりない。むしろ民間の方が進んでいる。番組はそうした例を紹介した。ただ、コロナ禍の後、“isolation”や　“loneliness”といった世界共通の社会課題を共有できた点は有意義だ。次に、英語のタイトルの「Active Communities」だが、どのような社会課題を意識してこうしたコミュニティー

を紹介しようとしたのかが、いまいち伝わらない。英語ドキュメンタリーの場合、もう少しメッセージをわかりやすく伝えた方が効果的だ。日本の取り組み方として何が新しいのかがわかったほうが、視聴者の関心をつかみやすいのではないか。

○　“human connections”は、この時代のキーワードの１つだと思うが、そのキーワードにぴったり寄り添うすてきな番組だと思った。下北沢や荒川など、東京における地域活性化の試みが、旗振り役の人や地域の人たちの声を通して描かれていて、日本の国内外でも参考になり得るのではないかと感じた。キャスターのシャウラさんやアンドレア・ポンピリオさんは、推進役の人たちと早々と打ち解けて、彼ら、彼女たちの狙いや思いを引き出しており、案内人としてよかったと思う。その上で質問が２点ある。まず、地域の人々が「つながる場所」を創っていくという取り組みはすばらしいものだと思うが、他方で新しいまちづくりのイニシアチブを担っている若手や中堅層の人たちは、移住して来た人たちのようだった。実際のところ、推進役や旗振り役の人たちというのは、どういった人なのか、地元の人なのかということを伺いたい。また、新しいまちづくりを進めていく上で、あつれきや困難などはなかったのか。地元民との信頼関係というものが、どのような形で築かれていったのか、伺いたい。新しいまちづくりの課題や乗り越え方などのヒントが番組の中で明確に示されていれば、ロールモデルとしての価値もより高まるのではないか。

（ＮＨＫ側）　この番組は昨年度まで「DESIGN TALKS plus」というタイトルのスタジオを中心としたトーク番組で、アンドレアさんとシャウラさんは番組当初からのキャスターだ。番組が１０年続いたこともあり、アクティブで新鮮なスタイルにしようと、キャスター２人がいろいろな人の声を直に聞くロケ形式にリニューアルした。モニター報告では去年より全項目で数値が上がっており、リニューアルが受け入れられていると感じている。一方で、以前はスタジオでじっくりトークし、そのコンセプトや意義、課題点などを掘り下げてなんらかの結論を追求していたが、番組をロケスタイルに変えたことで、紹介した事柄の意味合いや、番組全体のメッセージが伝わりにくくなっているようだ。改善していきたい。海外からの反応は、「自発性、献身性、創意工夫といった日本人の核となる価値観がよく表れており、自分たちのコミュニティーを大切にしていることがよく伝わった」、「自分たちの国は個人主義でこうしたコミュニティーづくりは難しい。互いに助け合おうとする日本人の伝統的な価値観を尊敬する。」など、コミュニティーづくりに日本人らしさが現れていると受け止めている人が見受けられた。

（ＮＨＫ側）　貴重なご意見、思いもよらなかったポイントを指摘いただき本当にありがたい。今回の「DESIGN × STORIES」は、世界に先駆ける日本の、特に若いデザイナーやクリエイターの活動を紹介し、世界のロールモデルになってほしいという思いで制作した。日本の人たちにも見てもらいたいという気持ちはもちろんあるが、ディレクターは純粋に海外に紹介したい

という思いだった。資料にあった「世界に先駆けて」の部分は、スペースの関係上説明が割愛されすぎてしまったが、「先進国の中ではイギリスが突出しているが、それに次いで日本も、担当大臣を置くなど政府の取り組みが先駆けている」という意味合いだった。

孤独問題に関心をもったディレクターがこの番組を企画したのだが、問題の解決策を提示するというより、コロナ禍などで人々がバラバラになってつながりを失っていることに目を向けそれを回復させようという先駆け的な動きがあることを知って、純粋に見に行きたいという思いで制作した。

構成手法については、アンドレアさんとシャウラさんはそれぞれ大変感性豊かなキャスターなので、彼らがいろいろな場所に出向き、そこで感じたものを集めて、最後に番組全体で何が見えてくるかという形にした。何か一つの結論にむけて構成要素を積み重ね、組み立てていくという手法には、あえてしなかった。ただ、ご指摘にあったように、最後まで見ていただいても物足りないところが残ったとするならば、改善の余地があったかもれない。また、ご指摘の通り、番組冒頭、シャウラさんが下北沢のことだけを話しているので、全編が下北沢を扱うとの誤解を与えてしまった。オープニングのナレーションで補足すべきだったと思う。海外の番組モニターからも同じ指摘があったので、反省材料としたい。

日本の中でも特殊な例を紹介しているのではないか、というご指摘については、たしかに日本で次々にこうした事例が現れているという状況ではないが、例えば今回登場した建築ユニットは、下北沢だけでなく横浜など各地の町おこしにも取り組んでおり、これからこうした動きが日本にどんどん広がっていくのではないかという見通しと思いを持って紹介した。また、彼らはほかの地域から来た人たちだが、プロジェクトにはもともと地元で店を営んでいた人も応募していて、ほか地域と地元の若い人たちがうまく融合しているのではないかと見ている。

コミュニティーづくりのプロセスの困難さについて、もっと時間を割いて描くべきだったのではという指摘もいただいた。確かに、細かくそれぞれの人が取り組んで来たことの話をたどっていくと、それぞれに困難や人間ドラマがあったと思うが、今回の番組で主軸にしたのは、そもそも彼らが何に目を付けて、何を実現させようとしているのかということだった。外国の視聴者にとっては、日本の銭湯や下町で培われてきた伝統的なコミュニティーの在り方など、丁寧に語り込まないと少々分かりにくい部分もあるので、今回は、日本の若いデザイナーやクリエイターたちが実現させようとしている中身を主体に伝えようとした。

タイトルについて、サブタイトルもなく、これだけではわかりにくいのではないかとの指摘もいただいた。ただ、モニター報告を見ると、海外の視聴者は「街の紹介なのか」という軽い気持ちで見ていくうちに、「そのような深いテーマがあったのか」とうまく受け取ってくれたようだ。しかし、タイトルについての工夫の余地はまだまだあるとは思う。

また、ご指摘のようにシャウラさんは妊娠していた。キャスターとして

ロケ現場に行きたいというご本人のこだわりと「出産ギリギリまで仕事をしたい」という希望があり、それに応えて移動や休憩に配慮しながらロケに行ってもらった。ちなみに、この後に放送した別の回では絵本をテーマにしたのだが、自分のお腹に子どもがいることを絡めながら、絵本が持つ温かさや意味を自分ごととしてリポートしてくれたということもあった。妊娠しながらキャスターを務めてもらうのは、大変意義があることだと感じている。

２０２３年 7月 国際放送番組審議会

２０２３年７月のＮＨＫ国際放送番組審議会（第７０４回）は１８日（火）ＮＨＫ放送センター（ウェブ会議）で５人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず「２０２３年度後半期の国際放送番組の編成」について、および、最近の国際放送の動きについて説明があり、意見交換を行った。引き続き、「NHK WORLD PRIME」Women on the Front Line 15% of Japan's Politicians、「RAMEN JAPAN」TONKOTSU RAMEN: FUKUOKA Part 1 について説明があり、意見交換を行った。最後に、国際放送番組の放送番組モニターと視聴者意向の報告を行い、会議を終了した。

（出席委員）

委員長	永井　均	（歴史学者、広島市立大学広島平和研究所 教授）
副委員長	阪田　恭代	（神田外語大学グローバル・リベラルアーツ学部 教授）
委　員	坂野　晶	（一般社団法人ゼロ・ウェイスト・ジャパン 代表理事）
委　員	杉山　晋輔	（早稲田大学 特命教授、前駐米大使）
委　員	仲本　千津	（社会起業家、㈱ＲＩＣＣＩ ＥＶＥＲＹＤＡＹ 代表取締役ＣＯＯ）

（主な発言）

＜「２０２３年度後半期の国際放送番組の編成」について、
および、最近の国際放送の動きについて＞

○　７月東海地方の記録的な大雨災害の際、ブラジル人が集住する愛知県と静岡県の４市で出された警戒情報を、ＮＨＫワールド　ＪＡＰＡＮのポルトガル語公式ＳＮＳで速報した件について、多言語放送が日本国内の外国人コミュニティーに展開できていることが分かった。多文化共生社会を実現していくためにさらに効果的に活用されることが期待される。

後期からニュース番組「NEWSROOM TOKYO」の再放送の回数を増やすという報告があったが、賛成だ。フェイクニュースが社会問題になり、公平で確かな情報が求められる時代なので、日本・アジアの視点からニュースを伝える時間を拡充することが必要である。

６月に放送された「あさイチ」にウクライナ出身のWorld News部のディレクター、ノヴィツカ・カテリーナさんが出演していた。ウクライナ側からの見方が強かったが、ウクライナの戦争を日本の視聴者にとって身近にしたという点で非常に効果的だった。放送当日だけでも 1200 件近い反響があったと聞いた。ＮＨＫワールド　ＪＡＰＡＮでも、英語字幕で当日の「あさイチ」を配信できるとよいのではないか。日本のモーニングショーを海外に紹介するきっかけにもなる可能性がある。

○　多言語メディア部が行っているＪＩＣＡの海外協力隊向けの研修でＮＨＫワールド

ＪＡＰＡＮ活用方法を案内していることについて、非常によい取り組みだと思った。公的機関による留学促進キャンペーンなども再開されはじめており、また英語圏以外への若い世代の渡航が増えてきているので、いろいろな機関と連携して同様の周知の機会を設けていけば、活用されることはもちろん、渡航した人が現地でコミュニケーションをとる際の手段になってよいと思うので、ぜひこのような展開を増やしてほしい。

（ＮＨＫ側）　ノヴィツカ・カテリーナが出演した「あさイチ」については、以前、国際放送した彼女のセルフドキュメンタリーをベースしたものだが、演出フォーマットは違うので、幅広い人にリーチできる方法を探っていきたいと思う。

ＪＩＣＡ海外協力隊員向けの研修については、ご指摘の通り、外部機関とのアウトリーチが課題と考えており、積極的に取り組みたい。

（ＮＨＫ側）　ＮＨＫでは今、若い世代に戦争について、公共メディアとしてどのように伝え続けるかということが大きなテーマになっている。８月１５日にＺ世代をターゲットにした戦争関連番組を予定しており、カテリーナディレクターも出演予定だ。引き続きアドバイスをいただきたい。

＜「NHK WORLD PRIME」

Women on the Front Line　15% of Japan's Politicians

（6月１０日（土）１０:１０ ほか）

「RAMEN JAPAN」 TONKOTSU RAMEN: FUKUOKA Part 1

（6月２１日（水）１０:３０ ほか）

について＞

○　女性の市議会議員を取り上げた「Women on the Front Line」は、日本の女性の社会進出、特に政治への進出という非常に扱い方が難しい問題をＮＨＫが国際放送の中で取り上げ、先の統一地方選挙の具体例をドキュメントするという極めて時宜を得た番組で、その努力を高く評価したい。しかし率直な実感では、日本社会、特に政治の中での女性進出の数字は番組中の「15.6%」という数字より、圧倒的に低いという印象がある。私も所属組織の中で人事に関わる際、女性をもっと増やそうと努力したが、簡単には増えない。政治分野で女性の進出がある程度進んでいるというアピールとしてはよいが、果たして、日本の全体像が語れているのか、客観的な姿を伝えているかと強い違和感を覚えた。

ラーメンを取り上げた「RAMEN JAPAN」は非常におもしろく、福岡の豚骨ラーメンには久留米、博多、長浜と３つのスタイルがあることなどを取り上げ、日本の食文化を伝える意味で海外に向けた番組としてよいと思った。

○　「Women on the Front Line」は、勢いのある展開で興味深く一気に視聴した。今回の統一地方選挙において女性議員が増えたのは大変喜ばしい。少しずつでも現実が変わっていると感じている。一方で、６月末に発表された世界経済フォーラムのジェンダーギャップ指数で日本は過去最低を記録し、まだまだ努力が必要な部分がある。今回は女性議員の選挙活動を取り上げたが、シリーズ化して、女性のエンパワーメントの観点から日本の課題をあぶり出すような番組を作ってもらいたい。また、NO YOUTH NO JAPAN 代表理事の能條桃子さんなど活発に発信している若手の女性たちの動きや、海外の実情、例えば、アフリカのルワンダは女性の議員が全体の６０％以上を占めており、国際理解を進める上でも海外の情報も盛り込むとよかったのではないか。

「RAMEN JAPAN」は、映像も美しく、臨場感にあふれる演出で、「早く食べたい」と思わせる番組だった。ラーメンをきっかけにその土地の歴史や特徴も知ることができ、興味深く視聴した。

○　「RAMEN JAPAN」は、特定の地域のさらに細分化した文化を伝えた点で、日本の食文化の繊細さと緻密さ、歴史まで語っていてよかった。ラーメンに特化したこの番組に、どれだけ視聴者からレスポンスがあったかぜひ教えてほしい。また、ラーメン以外のトピックスでもこうした番組をつくる余地があるか知りたい。

「Women on the Front Line」について、女性の社会進出、特に政治分野や官僚といった領域への進出の話題は、地方だけでなく国政など、ぜひ今後も取り上げてほしい。また、主人公がどちらも子育て世代の母親たちで、シングルマザーなど境遇の違いはあったものの、２人ともうたっている政策の中心が子育て支援だった。女性が参政する際の強みは子育ての分野で語るしかないのかという印象を受けたのが残念だった。同じ政治分野であっても違った政策領域で活躍しようとしている人や、分野を問わず女性が活躍していく姿を紹介してもらえるとよいと感じた。

○　「RAMEN JAPAN」は、日本とその文化を紹介する意味で大変効果的な番組だった。和食が世界遺産になり、ここ１０年でさらにグローバル化していて、もっと深いところを知りたいという要求が世界的にある。この番組は高い映像技術と新しい切り口でその要求に応えたものになっているのではないか。ただ味だけを伝えるのではなく、その背景にあるストーリー、つまりローカルなカルチャーの歴史や起源、ラーメンの歴史や起源を伝えることは非常に大事だ。

「Women on the Front Line」は、タイムリーな内容で、僅かではあるが社会に変化が起きている日本を描き、希望がある部分を見せられたことに意味があると思う。しかし、誇張し過ぎると日本の真実が伝わらない懸念がある。やはり国レベルの動きと対比し、まだ課題が多くあることやジェンダーの問題のみならず、新しい世代が出てきていることをバランスよく伝えることが必要ではないか。そして今後、彼女たちがどのように政策を実現し、議員としてどのような課題に直面するのか。そのフォローアップがあると良い。こうした番組は日本国民、日本国内の人々への周知もとても大事なので、ＢＳのみならず、地上波でも放送されるべきである。

最後にフォントだが、最新のユニバーサルデザインを使っている部分もある一方、明朝の部分もあり、地味さも目立つ。文字フォントはさらに工夫してほしい。

○　「Women on the Front Line」について、選挙離れが言われて久しい中、選挙とは何か、政治家の役割とは何か、市民の役割とは何かという政治と社会の原点を見つめ直すうえで、大変参考になる作品だった。２人の女性市議会議員候補者を軸に据え、彼女たちを通して日本の社会や議会に内在している問題を浮き彫りにする展開が、視聴者の理解を促す上で大変効果的だった。特に自分たちの生活実感をベースに、困難な社会の壁に風穴を開けようと立ち上がる２人の考えと行動は、具体的で説得力があった。また、ＳＮＳを駆使する選挙戦の手法は、日本に限らず、後進のロールモデルになるかもしれないと改めて感じた。そのうえで、２点質問したい。１つ目は海外からの反応。日本の選挙や女性を取り巻く環境の一端を伝えたこの番組に対して、海外モニターからの反応はどうだったのか。２つ目は人選について。高橋さんと石川さんに焦点を当てた理由や背景について、可能な範囲で伺いたい。

「RAMEN JAPAN」だが、着眼点がすばらしい。訪日外国人の数がコロナ前の状況に回復しつつある中で、インバウンド需要にも貢献できると思う。日本文化のいわば象徴の１つ、海外でも人気の高いラーメンについて、その歴史や作り方、そして作る側と食べる側の思いなどが本当に熱く語られていて、共感することが多かった。ラーメンスペシャリストの解説をいくつか挟み込んでいるところも効果的で、ご当地ラーメンの成り立ちや位置づけを理解するのに役立った。また、地図や番組のロゴ、ナレーション、軽快な音楽と映像、いずれもスピード感があって出色の出来栄えと感じた。質問が２つある。外国人から見たラーメンの魅力を伝える回は、シリーズの中にないのか。また、日本ではラーメン以外にもそば、うどん、そうめん、さらにはパスタなども愛好されているが、日本の食文化におけるラーメンの位置づけを示唆する、あるいは考えてみる切り口として、例えば「日本人と麺」といった特集もあり得るかと思うがどうか。

○　女性の参政は日本が直面する最大の課題の１つだと思う。地方の自治体における選挙を舞台に、実在の女性候補者を通して深掘りしたということは、大変社会的意義の深い番組だと思った。彼女たち１人１人のライフストーリーを通して、日本が解決すべき問題を考えるきっかけになるような内容だった。できれば多くの日本人に見てほしい番組だ。

（ＮＨＫ側）　「Women on the Front Line」への海外からの反応について、日本のジェンダーギャップの実態などへの厳しい指摘があるのではと思っていたが、一番多く印象的だったのは、同じ女性からの「勇気づけられた」とのコメントだ。一方でもっと男性の視点を入れられないのかという指摘も頂いた。

人選については、「選挙チェンジチャレンジの会」がベースになっている。３年ほど前の選挙で、いわゆる地盤・看板・カバンを持たず、ソーシャルメディアを駆使して当選した茨城県つくば市の女性市議会議員のもとに、アドバイスを求めて全国から集まってきた人たちだ。その中から今回の統一地方選挙にチャレンジする数十名に、動機などを丁寧に取材し、総合的に取材者を決定した。統一地方選挙の翌日の「クローズアップ現代」でも同じ内容を放送しているが、そちらはジェンダーギャップに絞らず、

複数の男性候補者も取り上げ、多様な意見を紹介している。また、NO YOUTH NO JAPANの能條さんたちについても取材し、ほかの特集番組で紹介している。政策が偏っているのではないかとの指摘について、女性＝子育てのようなステレオタイプに陥らないよう細心の注意を払ったが、候補者の多くは３０～４０代で、その人たちの取り組みを追っていった結果、自分たちの生活実感から率直に挙げた選挙公約に、子育て支援が多かったというのが実態だ。また、今回は当選までを記録したが、ご指摘にあったように大事なのは当選後だ。選挙をめぐる女性や若者の社会的な新しいうねりは、取材者としても強く感じており、ＮＨＫの全局ネットワークを駆使して今後も継続的に取り上げたいと思っている。

女性議員の割合が 15.6%よりもっと低いのではないかとの指摘について、これは総務省のデータから出した根拠ある数字だが、実感と食い違うのは、恐らく今回は地方議員の女性の割合だということだ。国政に絞るとパーセンテージはさらに落ちる。また、議会で女性がどのような役割を果たしているか、重要な立場にいるかということは数字だけでは分からない。この数字だけが日本のジェンダーギャップを表現するものではないことは自覚している。今後の報道に生かしていきたい。

（ＮＨＫ側）　地上波でも放送してほしいという点について、NHKワールド ＪＡＰＡＮで放送した翌日にＢＳ１で日本語版を放送したが、そもそも若者の政治離れや投票率の低さに対する問題意識から始まった取材であり、自分たちの暮らしをよくするツールとして選挙が使えることを知ってほしいという思いがある。委員の意見をもとに、より多くの人の目に留まるよう総合テレビなど地上波での放送につなげたいと思う。

（ＮＨＫ側）　「ＲＡＭＥＮ ＪＡＰＡＮ」への反響について、現在集計中なので最終的な数値ではないが、ＳＮＳで広報動画を展開しており、そのアクセス数だけでも通常を大きく上回る再生回数があった。動画共有サイトでも、ほかの動画と比べて、非常に短期間で視聴回数を伸ばし、視聴時間も長くなっており、海外からの関心の高さを示している。海外の豚骨ラーメンが好きな人たちがすぐさま反応しているようだ。日本にはラーメン以外の麺類もあり、今後どう展開するのかという質問があったが、まずはラーメンを理解してもらいたいという思いがある。例えば、寿司は世界的に認知度が高いが、海外に行くと日本人が寿司と思わないような驚くものも提供されている。まずは日本のラーメンが、日本の各地方でこれだけ進化して、それぞれの地域においしい一杯があるのだという正しい認識を広めていきたい。またラーメンをめぐる日本人のマナー、例えば食券機でチケットを買って食べることや、麺を“すする”という文化があることなども紹介していきたい。海外の人からすると“すする”のは下品とされるが、日本人が麺を食べるときには、すすらずに食べるほうが不自然で、あの音に五感が刺激される。そうしたことを押しつけがましくなく、現地の人に食べてもらう様子を映像で重ねていくことで、これが日本流のラーメンの食べ方な

のだということを紹介していきたい。まずラーメンを正しく伝えてから、そば、うどんなど、日本の麺文化の紹介を企画立案していけたらと思っている。

○　とにかく楽しく、正しく知識が伝わるようにしてほしい。誰もが事実を十分にチェックせずに動画を作り、ＳＮＳで気軽に発信できてしまう世の中だ。正しい知識に基づいて文化が伝わるよう、公共放送にも役割がある。

２０２３年 ６月 国際放送番組審議会

２０２３年６月のＮＨＫ国際放送番組審議会（第７０３回）は２０日（火）ＮＨＫ放送センター（ウェブ会議）で７人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず最近の国際放送の動きについて説明があった。引き続き、「Asia Insight」Youth Living in the Changing Hong Kong について説明があり、意見交換を行った。最後に、国際放送番組の放送番組モニターと視聴者意向の報告を行い、会議を終了した。

（出席委員）

委員長	永井　均	（歴史学者、広島市立大学広島平和研究所 教授）
副委員長	阪田　恭代	（神田外語大学グローバル・リベラルアーツ学部 教授）
委　員	遠藤　乾	（国際政治学者、東京大学大学院法学政治学研究科 教授）
委　員	佐藤たまき	（古生物学者、神奈川大学理学部生物科学科 教授）
委　員	杉山　晋輔	（早稲田大学 特命教授、前駐米大使）
委　員	仲本　千津	（社会起業家、㈱ＲＩＣＣＩ ＥＶＥＲＹＤＡＹ 代表取締役ＣＯＯ）
委　員	村上由美子	（ＭＰｏｗｅｒ　Ｐａｒｔｎｅｒｓ ゼネラル･パートナー）

（主な発言）

＜「Asia Insight」Youth Living in the Changing Hong Kong
（３月３１日（金）９:３０ ほか）について＞

○　大変よくできた番組で感銘を受けた。発信することで出演者に不利益がないよう繊細な注意が必要な内容だと思うが、かなり踏み込んだ取材が出来ていた。反体制派として服役させられた若い人たちがどのように考えているのか、中国大陸から香港にきた若い人たちの考えや思いも含め、このような取材をしたことに深く敬意を表したい。そのうえで、これが今の香港のすべてなのか、と思った部分もある。香港はイギリスの統治下におかれていた時代が長く、返還後も一国二制度の下、現地の富裕層、英国系白人や中国系アメリカ人などが暮らしているはずだが、今彼らがどうしているかがこの番組では語られていない。今の香港の置かれている大きな歴史の流れの中で、本来は触れなければいけない香港の姿が欠けているところに、やや違和感があった。

○　先週香港に行き、まさにこの問題の現状を目の当たりにしてきたところだ。番組内容に心を打たれた。取材される側も取材する側も中国当局からどう受け止められるか不安があったのではないか。報道の自由に関し、この２、３年で急速に圧力がかかっていると聞いている。それをこのように真実に迫って報道したことで質の高い番組になっていた。この問題をあえて取り上げたＮＨＫ側の決意にも大変感銘を受けている。このように若い人たちをクローズアップし、リアルなストーリーを紹介することは言論の自由、報道の自由、そして人権という部分にメスを入れていくという、メディア

からのメッセージになる。こうした番組を今後も引き続き、定期的に報道することが大変重要だ。メディアとしての責任でもあり、ぜひＮＨＫに続けていってほしい。

○　民主化運動から４年近く経った今、この香港の悲劇をもう一度取り上げたことに対して敬意を表したい。涙なしには見られなかった。当事者の若者たちは、自分たちがしてきたことが忘れ去られる恐怖も抱えていると思う。しっかり見続けているというメッセージは彼らへの大きな励ましにもなるだろう。中国本土から来た人の中には、香港の人たちから差別を受けた経験がある人がいると聞いたが、そのような可能性のある人たちもこの民主化運動で香港の人と時を共にしたという経験が深く心に刻まれていることが分かった。この番組でとりあげられていない香港のマジョリティー層がいたとしても、それを補って余りある気付きがあった。香港を長い間定点取材してきたＮＨＫだからこそできた番組だと推察する。

○　やはり実際にこのインタビューを受けた人たちが、その後、変な嫌がらせを受けることなどがなかったか心配になった。また、民主主義を求める人たちの声を主に取り上げていたが、今の香港を考える上で、その観点だけで十分なのか気になった。中国政府の方針を受け入れ、何の違和感もなく過ごしている人たちもいる。その人たちはなぜそう考えるのかなど、いろいろな観点で意見などを提示してもらえると、もっとよかったのではないか。

○　ここまで香港人の心情に迫って番組が作れるのだということに大変感銘を受けた。意外だったのは、中国本土出身の若者たちも香港がどうあるべきか、あるいは香港にいる自分がどのように生きるべきか考えていることだ。中国本土から移住してきた者は共産党と同じ考えの持ち主ではないかと型に当てはめて見がちだが、必ずしもそうではないと分かった。例えば、香港がイギリスから中国に返還されることが決まったときにカナダなどに渡った香港人も多くいたが、そのような人たちも香港を離れることに関して実は様々な意見や思い、考え方があったと聞く。今回の番組を見て、やはり国単位で人々をまとめてとらえるのは大括りすぎると痛感した。質問としては、取材の大変さということに関係するが、ほかの西側諸国で現在の香港についてどのような報道がされているのか、分かる範囲で伺いたい。

○　質の高い内容で心が動かされる番組だった。ＮＨＫはアジアの公共放送として、アジアの民主主義の状況を伝え続ける役割があり、その好例だと言える。台湾も大事だが、香港の民主化運動について記憶が薄れてきた状況の中でこの番組を作ったことに意味がある。また、既にここ３年間で２０万人もの香港人が海外へ移住している中で、香港に残る人たちにスポットライトを当て、特に香港の若者の多様な生き方が描かれていた。ジェンダーだけでなく、中国人なのか香港人なのかというアイデンティティー、そしてキャリアまで取り上げていた。これからのキャリアを積み上げていく中で、どのような人生の選択をするのか。弁護士、ジャーナリストなど、今の職業によってその選択が変わることがわかり、政治状況は異なるが、悩みを共有できた。彼らの状況を伝え続けてほしい。なお、タイトルが「Youth Living in the Changing Hong Kong」なので香港の若者の「日常」を描く生活番組だと勘違いしやすい。香港で民主

主義のために戦いながら日常を生きている人たちの心情を描いた番組だと思うが、あえて政治色を感じさせないものにしたのはなぜか。どのようなメッセージをタイトルに込めたのか、制作者の意図を聞きたい。

○　2019年の香港での民主化デモの衝撃、今日的な影響を市民の視点から追った、大変重い番組だと思った。2019年という年が香港の歴史にとっていかに重要な年だったのかということを、改めて認識させられた。若い世代、香港出身者だけでなく中国本土からの移民も含めて、異なる層と考えの持ち主に焦点を当て、２８分という短編ではあるが、香港の民主化デモの概略、そして国家安全維持法の制定などデモを巡るてんまつが市民に及ぼした影響を多面的に描いていると感じた。特に民主化デモが市民に与えた精神面への影響、市民の不安、葛藤や心の傷の深さというものをうかがい知ることができ、また取材を受けた複数の人たちの口から、彼らもまだ若いにもかかわらず「次世代によりよい社会を残したい。そのための種をまきたい」という言葉が発せられ、強く印象に残った。香港市民の複雑な胸の内をすくい取り、ドキュメンタリーにまとめた国際放送の取材班の取材力を高く評価したい。そのうえで２つ質問をしたい。政府に批判的な出演者の安全面について、事前に何か配慮していたのか。また、この番組は、香港で放送されているのか、インターネットでの視聴は可能なのかについて教えてほしい。

（ＮＨＫ側）　今回は、香港に住んでいるディレクターが現地で取材し、その後日本に来てもらい、一緒に編集をした。ニュースなどで、香港から出ていった人たちを海外で取材したり、海外で香港の動きに反対している人たちを取り上げたりしているが、香港に残った普通の人たちがどうしているのかはあまり伝えられていない。香港では普通の市民生活をしていた人たちのおよそ４人に１人がデモに参加した。その人たちが、今、当局などの圧力を受けながら過ごしている。それを伝えたいという思いで、香港の制作者と一緒に焦点を当てた。安全面については私たちも一番気を付けたところだ。取材の足がかりにしたのはセラピーを行っているサロンで、そこに集まる、民主化運動に参加して心に傷を受けた人たちに話を聞きながら取材対象を探した。本人の同意をきちんと取った上で、顔は出しているが本名は公表していない。英語のファーストネームだけで伝えることで了解を得た。インタビューの内容については、実は、中国当局などを直接批判するような強い言葉はあまり使っていない。彼らの心情を中心にインタビューをし、インタビューのどの部分を使用するかという点でも、放送前に彼らに了解を得て、慎重に取り組んだ。また中国本土から来た人は、もともと香港にいる人よりも中国本土からのプレッシャーがあるので、彼女たちについてはデモに参加したかどうかということも、番組の中では触れていない。何重にも配慮しながら放送した。放送後に、彼らがこの番組に出演したことで何か安全に関わるようなこと、あるいは不利益を被ったという話は聞いていない。

（ＮＨＫ側）　「Asia Insight」は，アジアの今をきちんと伝えることを大切にし、現地の取材者の感覚で、当局が問題視する境界線がどこにあるかを探りながら番組を制作している。その線を踏み越えないようにしながらも、真実や内情に迫ろうとしている。香港にはいろいろな層の人々がいて網羅し切れていないことは自覚しているが、今回は香港の若者に絞り、その気持ちを描きたいと考えて制作した。また、日本以外の西側諸国の報道について、すべてを把握しているわけではないが、香港を離れて海外に行った人、中でも英語を話す人の報道が多くなっているようだ。ＮＨＫはアジアの放送局であることを意識して、香港に残った人の気持ちを現地の言葉で聞きたいと取材を進めた。また、この番組は香港でも放送され、現在ＶＯＤでも視聴できる。その意味でもリスク管理を徹底し、彼らに不利益が及ばないよう配慮した。タイトルについては、以前もほかの番組で指摘いただいたが、やはりあまり踏み込まない中立的なタイトルを付ける傾向がある。もっと若者の心情を伝える番組だというニュアンスがわかるよう、タイトルのつけ方には今後研さんを積んでいきたい。

２０２３年 5月 国際放送番組審議会

２０２３年５月のＮＨＫ国際放送番組審議会（第７０２回）は１６日（火）ＮＨＫ放送センター（ウェブ会議）で７人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず最近の国際放送の動きについて説明があり、意見交換を行った。引き続き、「NHK WORLD PRIME」A Director's War、「NHK WORLD PRIME」Taiwan's Windy Frontline Islands について説明があり、意見交換を行った。最後に、国際放送番組の放送番組モニターと視聴者意向の報告を行い、会議を終了した。

（出席委員）

委員長	永井　均	（歴史学者、広島市立大学広島平和研究所 教授）
副委員長	阪田　恭代	（神田外語大学グローバル・リベラルアーツ学部 教授）
委　員	遠藤　乾	（国際政治学者、東京大学大学院法学政治学研究科 教授）
委　員	坂野　晶	（一般社団法人ゼロ・ウェイスト・ジャパン 代表理事）
委　員	佐藤たまき	（古生物学者、神奈川大学理学部生物科学科 教授）
委　員	中曽　宏	（㈱大和総研 理事長）
委　員	仲本　千津	（社会起業家、㈱ＲＩＣＣＩ EVERYDAY 代表取締役ＣＯＯ）

（主な発言）

＜最近の国際放送の動きについて＞

○　ラジオの英語番組「Asian View」について、４月２４日から、全米公共放送ラジオＮＰＲ（National Public Radio）系列のノースカロライナ州ＷＦＡＥ局が配信を開始したという報告があった。ＮＰＲでの配信の意図と、配信増加の経緯について聞きたい。またＧ７広島サミット前に、アメリカの雑誌が、岸田総理大臣をフィーチャした記事で、当初のタイトルを「岸田総理大臣は、平和主義だった日本を軍事大国（military power）に変える」として、話題になった。その後「岸田総理大臣は、平和主義だった日本に国際舞台でより積極的な役割を持たせようとしている」として、記事の内容により即したものに変更された。去年閣議決定された安全保障関連文書の決定により、日本が安全保障においてさらに積極的な姿勢を示していることは確かだが、世界標準から見て「軍事大国」は誇張された表現になり、誤解を招く。また、Ｇ７広島サミットは総理自身が「核なき世界」と平和を目指す日本の姿勢を伝えようとしている大事な時期だ。ＮＨＫワールド　ＪＡＰＡＮにおいても日本のメッセージがバランスよく伝わるよう心掛けてほしい。

（ＮＨＫ側）　「Asian View」は、2019 年の放送開始以来、ＮＰＲで配信が増えている。独自インタビューなどを含めて５分にまとめられた日本とアジアのニュースが、アメリカのニーズにマッチしたためと考えている。去年

夏、ニューオーリンズで開かれた全米公共放送の会議でＰＲしたこともきっかけとなり、番組への認知が広がり、理解が深まったのではないか。米国内でＮＨＫワールド　ＪＡＰＡＮのプレゼンスを高めるためにも配信を増やす努力を継続したい。

（ＮＨＫ側）　Ｇ７広島サミットには、現地に総勢１８人派遣する予定だ。中継などを通じ、最新の議論の内容を正確に伝え、ウクライナ侵攻、台湾情勢など緊迫する国際情勢の中、広島で開催されるＧ７の意味合いを掘り下げていきたい。また、中継では被爆者が出演して直接声を届けるなど、広島開催ならではの意義をふまえた内容とする予定だ。

＜「NHK WORLD PRIME」A Director's War
（4月２２日（土）１０:１０ ほか）
「NHK WORLD PRIME」Taiwan's Windy Frontline Islands
（3月２６日（日）２０:１０ ほか）
について＞

○　「A Director's War」は、World News部のディレクターで、番組にも出演しているウクライナ出身のノヴィツカ・カテリーナさんだからこそ制作できた番組だ。カテリーナさんの視点を通して、キーウのウクライナ人や東北地方に住む避難民、ロシア人にさせられたクリミアのウクライナ人やカテリーナさんの妹、親友アンナさんの経験と心情が紹介された。登場人物とカテリーナさんの間にある、気持ちの距離感、ずれも描かれ、人々の動きやストーリーが、遠近法を使った表現のようにカテリーナさんの周りに展開されたことが印象深かった。カテリーナさんの考え方が、時間とともに、人々との関わりを通して変化していったことも印象に残った。番組冒頭で「東京在住のウクライナ人でＴＶディレクター」と自己紹介したカテリーナさんだが、避難民や戦場で救急医療隊員として命をかけて働く女性へのインタビューを経て、「自分には何ができているのか。安全な日本でウクライナの番組を作っていることが取るに足らないことに思える。」と葛藤するようになる。そして、人々と対話を続け、最終的に「私はここで自分の闘いをしている」と意義を見出していく過程が描かれる。親友のアンナさんがウクライナに戻る決断をする中で、カテリーナさんは残る、そのこともずれの一つで印象的だが、「私はここで闘う」と決意を固める経緯には説得力があり、心が動かされた。

「Taiwan's Windy Frontline Islands」は、動きがなく、はじめは静物画を見ているような印象だったが、「紀行ドキュメンタリー」の手法だ、と気づき納得した。中国の台頭という強い風が吹く中、中国大陸に近い金門島や馬祖島の景色や暮らしをあえて静かにつづって見せることがこのドキュメンタリーのねらいなのだろう。ＮＨＫでは台湾の海域で海底の砂を採取する中国船に関して「追跡　謎の中国船」という特集番組を放送するなど、緊張の高まる海域から伝えられる内容には驚かされることが多い。それに比べると動きの少ない番組だったが、その中に以前との変化が見え、台湾らしい活動や人々が描かれ、印象に残るものになっていた。

○　「A Director's War」は、日本に暮らし、働くカテリーナさん本人の葛藤や、周囲のウクライナの人々の声を直接聞くことができる、貴重な番組だ。ＮＨＫとしては珍しいと思うが､ディレクターのメッセージがはっきり出ているという点が印象深く、よいチャレンジをしたと思う。海外モニターの反応もよかったということだが、どのような点が指摘されたか聞きたい。視点を変えると、在日のロシアの人たちの葛藤も存在するだろうと思うので、別の機会にそちらの声も知りたいと思った。

「Taiwan's Windy Frontline Islands」も、複雑な背景のある地域やそこに暮らす人々をストレートに描く番組で、歴史や文化を知るよい機会となった。明確なメッセージを込めており、見やすい番組だという点もよかった。以前から島に暮らす人に加え、若者や観光客などの視点が取り上げられているのも興味深かった。過去の軍事施設が、今は射撃のシミュレーションをする娯楽の場に変わり、子どもや若者が楽しんでいるというシーンがあったが、歴史的な背景についてどのような理解をもち、実際に体験してどう感じたかなど、もう少し深く聞いてみたかった。

○　「A Director's War」､「Taiwan's Windy Frontline Islands」ともに、深く平和について考えさせられる番組だ。「A Director's War」では、“Victory＝勝利”ということばに日本人が抵抗を感じるという部分が印象に残った。戦争に負けて平和を与えられた国、守られて平和を維持する国で生きていると、勝たなければ平和はないという状況を理解するのが難しくなっているのだと実感させられた。カテリーナさんが、安全な日本にいることで罪悪感を持っていることを知り、ウクライナの現状の厳しさも再認識した。

「Taiwan's Windy Frontline Islands」の島々は、地図で見るよりも中国大陸との距離が近いように感じられ、実際に島で戦闘があった歴史もあらためて認識した。一方で人の往来や商売が活発な現状も知り、緊張の中で島の人々が中国に向き合ってきたことを強く実感した。残された砲弾を拾い、ナイフに加工して中国観光客に売っていることには、たくましさも感じた。あらためて台湾について学び、考えさせられるよい番組だ。

○　「A Director's War」は時間をかけて丁寧に作られており、構成も内容も優れた番組だ。日本アニメファンだったカテリーナさんが来日して、放送に従事するようになったわけだが、ウクライナが侵攻されたことが劇的な転換点になり、自分の貢献が足りないのではないかと葛藤する、その思いが切ないほど伝わった。東京のウクライナ正教会のポール・コロルーク司祭との対話で「日本で状況を伝え続けることが自分の運命的な役割なのだ」と悟り、今の仕事を通じて最善を尽くすことが自分の闘いであると心を決めた。このような劇的な展開をカテリーナさんのモノローグと、周囲の人の動きを組み合わせて、起承転結のある構成にした点が番組の成功につながった。ウクライナの人々と日本の受け止めとのギャップも興味深い。きらびやかな日本のクリスマスとウクライナの戦禍の対比は視覚的に強いコントラストを生んでいた。また、ウクライナの人々の「勝利があっての平和」「他人の死の上で自分が生きている」という考えと、「殺し合わないことが平和」という日本人の観点との違いも際立っていた。ウクライナのほか、ミャンマー、アフガニスタンなどの人々の苦難を私たちがどの程

度理解しているのか、ということにも思いが及んだ。記憶の中で埋もれていく人々の苦しみに目を向けさせることは公共放送の役割だと思う。番組上、重要なコロルーク司祭のことばは、聞いただけでは印象に残らない可能性があり、字幕で強化するなど工夫が必要ではないか。

「Taiwan's Windy Frontline Islands」は、紀行番組として興味深く視聴した。台湾の、軍事的な拠点としての意味合いは高まっていると感じ、島民と駐留軍兵士の一体感が強いということが分かった。一方で中国本土にルーツを持つ住民も多く、かつ内戦の戦禍を乗り越えてきた人たちだけに、平和に対する希求が強いことも心に残った。タイトルに込められたメッセージは、1949年に中国人民解放軍が金門島上陸作戦を敢行した際、強い北風のため、当初の計画とは異なる古寧頭に上陸、混乱した人民解放軍が結果的に敗退したという歴史上のエピソードとも関わりがあるだろう。最近では対岸の中国の空港の拡張工事で、もともと本土から来た牡蠣の養殖がダメージを受けているという話も中国からの風を感じるエピソードだ。台湾海峡問題がクローズアップされている現在、背景に潜む複雑な側面に対する理解が進んだ。

○　「A Director's War」は、カテリーナさんの葛藤やこの１年がよく伝わる内容だった。カテリーナさんと日本人プロデューサーの会話から、“Victory”と“平和”の２つのことばが持つ意味の違いを認識させられた。プロデューサーのことばは、一般的な日本人を代表するもので、日本人視聴者は自分を見るような意識で捉えることができるだろう。カテリーナさんが葛藤を乗り越えて前進し続けることを選択する姿にも勇気づけられた。クリスマスの情景については、カテリーナさんが歩いている場面が、やや作りこまれている印象があり、気になった。

「Taiwan's Windy Frontline Islands」は、紀行番組として楽しめたことに加え、「台湾では全員中国に対して抵抗意識を持っている」という認識が間違っていたことに気づき、改めて考えさせられた。経済的にも近く、観光客も受け入れているという中で依存関係が生まれており、台湾情勢がどのように動いていくのかという点も考えさせられた。沖縄における米軍基地や、イスラエルにおけるパレスチナの問題などと同様、白黒はっきりつけられない面が内在する点で、台湾も例外ではないことを知ることができた。

○　ウクライナと台湾をテーマにした２つの番組には共通のねらいがあり、危機や緊張の下にある暮らしの中で平和について考える題材となっている。「A Director's War」は、印象に残る、大変よい番組だ。ウクライナのニュースについてあまり関心のない視聴者でも、日本にいるカテリーナさんのことを考えることでウクライナを思い、記憶にとどめるだろう。日本ならでは、ＮＨＫならではのオリジナルな番組だ。他国にウクライナの状況を伝えていくという役割を担うカテリーナさんが、葛藤や苦しみを経て、最後に希望を見出せるようになった点もよかった。職場で日本人スタッフがサポートしている姿もよく出ていた。カテリーナさんと学生の対話のシーンでは、率直なやりとりの中で、学生たちとカテリーナさんの平和観の対比が浮き彫りになった。多くの人に平和について考えてもらうきっかけになると思う。タイトルについて、「A Director's War」だとウクライナがテーマの番組だと伝わらず、動画共有サイトで検索してもヒットしない可能性がある。副題をつけた方がよい。

「Taiwan’s Windy Frontline Islands」は、アジアにおけるホットスポットについて日本のメディアとして発信した点が評価できる。台湾の一般的な暮らしを見つめる「静」と、背後にある軍事的な緊張という「動」がある番組だが、時事的な番組として見るのか、紀行番組として見るのか、とまどいもあった。また、題名だが、最初はWindyの意味が分かりにくいと感じたが、番組を見るうちに、風が比喩として使われ、緊張の最前線で吹く風、だと受け止めた。しかし海外の視聴者を考えた場合、番組の中のナレーションを通して、制作者の意図をもう少し分かりやすく伝えた方がよいのではないかと思った。

○　「A Director’s War」は、戦争をウクライナ市民の目線と肉声から深く掘り下げ、被害の実相や痛みを非当事国の人たちに伝えた秀逸な番組だ。家族による現地からの緊迫した報告や、日本在住のウクライナ人へのインタビューなどは、カテリーナさんだからこそ可能となった取材で、オリジナリティーの高い番組だ。また、「平和とは何か」という根源的な問いを視聴者に鋭く投げ掛けて考えさせる、重い内容でもある。カテリーナさんの家族の歴史や日本との関係をサイドストーリーに織り込むことで、番組に奥行きが出たと思う。現地で家族や友人が命の危険にさらされる中、日本で取材を続けるカテリーナさんの深い苦悩と葛藤や選択というパーソナルな部分の描写は、視聴者の心を揺さぶるに違いない。セルフドキュメンタリーとしてストーリーを展開したことについて、どのようなことに配慮や注意をしたか、制作者の間でどのような議論があったかなどについて関心をもった。

「Taiwan’s Windy Frontline Islands」は、東アジアの安全保障上、台湾有事への懸念が高まる今、市民目線で現状を鋭く見つめた良質な番組だ。金門島と馬祖島の近現代史を縦軸に、現地住民の生活や思いを横軸に据えることで、２つの地域の現況や課題が立体的に浮かび上がった。特に平和な未来を希求する島の人たちのことばと思いを、視聴者に届けた点が重要だ。中国大陸から吹き込む風や外圧を１つのモチーフに、中国本土が金門島と馬祖島に与えてきた政治的、軍事的影響に加え、砲弾で作った包丁や金門島の名物の麺、牡蠣ラーメンなど、文化的、社会的な側面にも注目した点がよかった。音や映像もすばらしかった。中国本土の人々が台湾に旅行できる制度的な背景や仕組みについても説明があるとよかった。例えば、中国大陸側から台湾に、一層の交流促進を目的とした、いわゆる三通政策と関連する部分もあるかと思う。また、ランタン祭りが印象的に描かれているが、春節との関係についても説明があると分かりやすかった。かつて日本の植民地だった台湾の歴史や東アジアの平和を考える上で、この番組が示唆するところは多いと感じた。ぜひ日本語版も制作してほしいが、予定はあるか。

（ＮＨＫ側）　「A Director’s War」は、総合テレビで放送したこともあり、視聴者から数多くの手紙が届いている。多くは日本人からで、改めて平和の本質を考えるきっかけとなった、というメッセージや、カテリーナを応援する内容のもので、好評意見が多かった。ウクライナ正教会のコロルーク司祭のコメントについて指摘があったが、鍵となることばで重要なので、字幕などでフォローすることを考えてもよかった。タイトルについて、「A Director’s War」の後に「Fighting for Ukraine from Japan」とつける

案も検討したが、最終的にはシンプルなタイトルを選び、短くした。動画共有サイトなど、ユーザーが検索する場合には、ウクライナということばが入っていた方が目に触れる機会が多かったかもしれない。セルフドキュメンタリーに取り組むにあたり注意したことは、カテリーナ自身のことばやメッセージを大切にするということだ。前作は、ロシア語とウクライナ語のバイリンガルであるカテリーナや友人・家族が、ウクライナ語のアイデンティティーに目覚めていくストーリーで、去年４月、５月に放送した。この番組の制作時に、本人の意図やことばを大切に考えることの重要性を学び、今回の制作に生かした。

（NHK側）　今回は、自分自身の考えをストレートに番組に生かした。チームからも、感じていることをそのまま表現するように助言された。日本の放送局で働き、日本人の平和や戦争に対する意見に触れてきた中で、一般的な平和や戦争への意見と、今回の事態はまったく異なることを伝えたかった。侵攻された側に立つ自分にとって、平和を目指そうと言われることに違和感もあったし、傷つくようにもなっていた。ただ、対話の中で、考えを伝えることができればメッセージは届く、ということにも気づくようになり、職場での会話も含めて「伝える」番組に取り組みたかった。職場での上司との会話や、自分のプライベートも番組に取り込むことはチャレンジングだったが、自分の考えをストレートに表現できるシーンとなり、実現できてよかった。日本とウクライナのクリスマスの対比を印象付けるため、自分がいつも歩いている東京の通りのシーンを入れたが、演出したように見えるという感想もあり、どのように映像で対比を作れば正解なのか、迷うところだ。東京での日常の風景と、ウクライナの家族の毎日とは大きなギャップがあって、別世界だ。その落差をうまく映像にできないか、と考えた。ぜひ、その方法について助言があれば聞きたい。

（NHK側）　日本に住むロシア人の声を番組にできないか、という意見について、国際放送局多言語メディア部では、ロシア人のスタッフも勤務しており、ロシア人の葛藤に焦点をあてたラジオ番組なども作っていることを補足したい。

（NHK側）　多言語メディア部のロシア語班では、ラジオ番組を毎週制作していたが、ウクライナ侵攻後、半年ほど休止した。番組を再開する際、以前の、お便りを読むトークスタイルから、今回の事態に向き合い、日本在住のロシア人の動きや葛藤なども伝える内容へと変更した。日本国内のロシア人によるウクライナ支援について伝えた企画に対し、ヨーロッパに避難しているウクライナ人から感動や驚きを伝えるメッセージが届いたこともある。試行錯誤の中で企画を続けている。

（NHK側）　「Taiwan’s Windy Frontline Islands」は、二人の異なるバックグラウンドを持つ制作者が担当した。一緒に制作したプロデューサーは、報道番

組制作の経験が多く、他方の私は、紀行番組や食関連の番組を制作することが多い。二人の持ち味とスキルを生かして制作したのがこの番組だ。この島々に注目したきっかけは、台湾海峡の緊張が高まっていることだったが、調べていくと、明朝・清朝にさかのぼる歴史と文化があり、現代史でも、国共内戦をへて、戒厳令、民主化、そして大陸との新たな緊張など、非常に興味深いテーマがある。番組スタイルを議論するうちに、紀行番組風に現地を訪れ、「風」をテーマにして、人々や文化に触れつつ「いま」を見て行きたいと考えるに至った。入り口は静かな番組で、どこに向かうのか、視聴者にとまどいを与えることもあったかもしれない。また中国大陸からの訪問者の声を聞ければよかったが、コロナ下の往来制限の時期とも重なり、十分にその点が取材できなかった。若者に対する取材も深められればさらによかったと思う。中国本土では文化大革命の影響で伝統行事が減ったが、島には残っているといった意味合いも深められればよかった。タイトルについてもよりふさわしいものを検討していきたい。日本語版については、今のところ予定はない。

（NHK側）　番組制作のきっかけは、地図上、金門島と馬祖島が中国大陸とかなり近接していることに気づき、中台の緊張が高まり、日本も防衛費を増額しようとしている中で、最前線に暮らす島々の人たちの暮らしはどうなっているのか取材したいと思ったことだ。ちょうど台湾で新型コロナウイルス感染症に関わる規制が緩和されるタイミングでもあった。最前線であるだけに、軍事的な取材は難しく、紀行スタイルで人々に会うことが、理解を深める突破口になるのではと話し合った。

（NHK側）　NHKは、「客観的に報道する」ことを基本としているが、ある個人にしか伝えられない内容があれば、セルフドキュメンタリーの手法を試みることもある。今回も、そのようなケースにあたる番組で、カテリーナディレクターだからこそ届けられる内容で、視聴者の心を動かすことにつながったと思う。デジタル化が進む中で、一人称で発信されるコンテンツが増えてくると思うが、一概にこれらを否定するのではなく、ふさわしい手法があれば、チャレンジしていくことが必要だ。また、誰が伝えているのか、を明らかにし、事実の検証のプロセスを透明化していくことも必要であると認識している。ミャンマーやアフガニスタンについても、NHKとして伝えるべきだという指摘があったが、その通りだと考えている。ネット上などに公開されているさまざまな情報を分析・調査し、事実を読み解くオープン・ソース・インテリジェンスの手法でミャンマーの今を報道し続けているのも、それがNHKの公共メディアとしての役割の一つだと考えているからだ。デジタル社会が進む中、公共メディアとしての役割は何か議論が進んでいるが、これらと真剣に向き合い、必要な取り組みを続けていきたい。

２０２３年 ４月 国際放送番組審議会

２０２３年４月のＮＨＫ国際放送番組審議会（第７０１回）は１８日（火）ＮＨＫ放送センター（ウェブ会議）で６人の委員が出席して開かれた。
会議では、まず最近の国際放送の動きについて説明があり、意見交換を行った。引き続き、「NHK WORLD PRIME」Steve Jobs and Japan、「THE ANIME STUDIO」WIT STUDIO について説明があり、意見交換を行った。最後に、国際放送番組の放送番組モニターと視聴者意向の報告を行い、会議を終了した。

（出席委員）

委員長	永井　均	（歴史学者、広島市立大学広島平和研究所 教授）
副委員長	阪田　恭代	（神田外語大学グローバル・リベラルアーツ学部 教授）
委　員	遠藤　乾	（国際政治学者、東京大学大学院法学政治学研究科 教授）
委　員	坂野　晶	（一般社団法人ゼロ・ウェイスト・ジャパン 代表理事）
委　員	佐藤たまき	（古生物学者、神奈川大学理学部生物科学科 教授）
委　員	村上由美子	（ＭＰｏｗｅｒ　Ｐａｒｔｎｅｒｓ ゼネラル･パートナー）

（主な発言）

＜最近の国際放送の動きについて＞

○　来月のＧ７広島サミットに向けて、国際放送のコンテンツには期待が高まるだろう。また、３月の日韓首脳会談を、日韓関係の転換点として詳しく報じたことに関連して、海外モニター報告では、ドイツの視聴者の「太平洋戦争中の徴用をめぐる問題で、韓国政府が解決策を発表したニュースは興味深かったが、この解決策に対する日本の人々の反応についても知りたかった」というコメントが紹介されている。恐らく一つの企画のみを見た感想だと思うが、このようなニーズがあるということは指摘しておきたい。また、「台湾有事」をテーマにしたニュース企画を大変興味深く視聴した。アジアの放送局として、安全保障の緊張感を、現地の人々の感覚で伝えることは重要なので、ぜひ継続して取り組んでほしい。さらに、国際放送の広報を、メタバース空間で試行しているという報告について、メタバース空間はコミュニティーづくりに効果的ではあるが、利用する際には、ハッキング対策や悪用されないための監視体制に留意することも必要だ。

＜「NHK WORLD PRIME」 Steve Jobs and Japan
（3月２５日（土）9:10 ほか）について＞
＜「THE ANIME STUDIO」 WIT STUDIO
（2月１５日（水）9:30 ほか）について＞

○　「WIT STUDIO」を視聴して、日本アニメの世界的人気を再認識した。最近サウジアラビアを訪れた際、番組で紹介されたアニメイベントがちょうど開催されていた。当初の予定から延長して開催されていたようで、現地での人気、注目度が高いことを実感した。アニメへの関心が、国や地域によってどのように違うのか、また、ニーズに合わせて多言語による展開を実施する施策が取られているのか、聞きたい。

「Steve Jobs and Japan」は、聞きやすく、心にしみるようなナレーションがよかった。スティーブ・ジョブズに影響を与えたさまざまな日本の芸術が紹介されているが、その中には、新版画のように、日本人にも詳しくは知られていないと思われる分野もあった。番組の中で詳しく説明するのは難しいかもしれないが、関連のウェブサイトで作家に関する情報を補足するなどの工夫があればなおよい。番組から刺激されて、興味をより広げてもらえれば、日本への次なる関心につながると思う。

○　カナダやアメリカでは、多くの漫画が翻訳され、読まれている実感を持っていたが、「WIT STUDIO」を見て、中近東を含めた世界各地にアニメへの関心が広がっていることを知り驚いた。また、技術が、かつてのセル画を動かす手法からコンピューターグラフィックスに革新的に変化していることも発見だった。結果的に、かなり動きの速いアニメを作り出し、スピード感にも革新が生まれていることを知った。さらに、サウジアラビアで現地のファンが日本語で質問に回答している場面があり、日本アニメをきっかけに日本語を習得している人が増えているのかもしれないと感じた。このような傾向について、取材時に気づいた点があれば、教えて欲しい。

○　両番組ともに、日本特有の社会的、文化的背景をうまく紹介する内容だった。海外発の同様の番組に比べ、日本社会・文化を深く理解している日本制作チームならではの充実した内容になっていた。

「Steve Jobs and Japan」で紹介された内容について、過去に何度か見た記憶があるので、すでに放送されているのではないかという印象を持った。ジョブズという、世界を代表する人物の、日本との接点をテーマにした深い内容の番組で、日本ならでは、ＮＨＫならではの番組だった。「WIT STUDIO」も、人気のアニメ制作現場を取材するだけではなく、日本からの視点を加え深く掘り下げられており、ＮＨＫが制作した意義を感じた。

○　両番組とも大変楽しく視聴した。まず「Steve Jobs and Japan」について、ジョブズが、日本好きらしいということは知っていたが、日本文化との最初の接点となった、幼なじみの母が飾っていた新版画の話など、背景や経緯について未知の情報が多かった。世界的に知られた人物と日本文化の間に深い絆があったことを知り、フランス印象派の画家たちが浮世絵に影響を受けたという話を知った時の衝撃に匹敵する驚きを

感じた。新版画、ソニー製品、陶器とのつながりについての解説は、すべてリアルで納得できる内容だった。確かにＮＨＫ、日本の制作者にしか作れない番組だと思うが、日本との関係性を客観的に引き出すためには、インタビュアーは外国人を起用したほうがよかったかもしれない。取材者自身が聞き手となる利点もあると思うが、日本人相手だから語ったのではなく、圧倒的な事実として日本との絆があったのだ、という説得力を加えるため、外国人を相手に話してもらうやり方もあったのではないか。

「WIT STUDIO」は、制作過程での苦労など、普段知ることのできない内容を見せた点で貴重だ。ＮＨＫではWIT STUDIOの「進撃の巨人」をはじめ、多くの人気アニメを放送しているが、アニメ作品の背景を伝えるドキュメンタリーが作られていることは大変よいと思う。ただ、制作者に密着して話を聞くだけではなく、第三者的視点を加えるなど多角的な描き方をすればすばらしさがより際立つのではないか。例えば、日本アニメの特徴は何か、他の国の専門家の視点や歴史的視点から伝えてみてはどうか。違う番組になるかもしれないが、視点の多角化により、日本の魅力をより立体的に描けるのではないかと思う。アニメ制作の現場はかなり海外に移ったと聞いているが、日本のソフトパワーを守り、高めるためにも多角的な視点で魅力に説得力を持たせることが重要だと思った。

○　「Steve Jobs and Japan」について、ジョブズと日本の具体的なつながりが示されたことは、日本の放送局ならではの成果だと思った。新版画、ソニーの製品、陶芸の例をもって、具体的に美の原点を示し、アップルの製品開発とつなげた点は評価したい。ただ、字幕について、ユニバーサルフォントを使用する、またデザインに留意するなどすれば、さらに質の向上につながるのではないか。

「WIT STUDIO」を含めたアニメ関連番組について、部局横断プロジェクトを立ち上げ広報を強化しているという報告があった。アニメは、日本のソフトパワーを構成する大事な題材なので、よい取り組みだ。番組内容については、常に新しい視点で伝え、アニメ人気を支える新しい担い手や作品を紹介することも重要だ。サウジアラビアのイベントは、グローバルな広がりの最新の例の紹介として効果的だった。今後は、ベトナムなどアジア地域についても取材をしてはどうか。番組では日本アニメの突出した特徴として、技術に焦点を当てていたが、ストーリーの力、込められたメッセージにも特徴があると思う。物語の構築やメッセージの表現の仕方などにも注目してほしい。

○　「Steve Jobs and Japan」は、世界で最も有名なアメリカ人の１人であるスティーブ・ジョブズの人生と日本との関わりを軸にした、秀逸な番組だと思った。また、細部を重視するジョブズの美学が、日本の文化と共鳴していたことが強く示唆されていた点も興味深かった。冒頭でジョブズがマッキントッシュを発表した時の映像が使われているが、コンピューター画面に映し出された日本女性の版画の謎が番組の進行とともに少しずつ解き明かされていくなど、構成や仕掛けが巧妙だと感じた。ジョブズが日本をこよなく愛し、日本文化に敬意を払って積極的に学び、自社の製品に取り入れていた事実が、関係者の証言を通して多面的に描かれていた。本番組は、海外の視聴者に、ジョブズを入り口に日本文化の一端を伝える役割も担ったのではないか。加えて、本番組はジョブズのもう１つの伝記にもなっている。性格やこだわり、行動様

式、哲学が、関係者の証言を通して浮き彫りにされ、ジョブズについての深い理解にも貢献する内容だった。インタビューを受けていた人たちのリラックスした表情が印象的だったが、これは、取材者の人柄やお互いの信頼関係が反映したものではないかと思う。ナレーションも大変聞きやすかった。よい番組なので、日本語版も作られればよいと思う。

「WIT STUDIO」は、尺が２８分という短編ではあったが、内容が非常に濃密で飽きさせることのない番組で､海外のアニメファンにとって垂ぜんの的になるだろう。番組の中で、アニメーターたちが制作上のテクニック、技術や創造の秘密をかなり率直に語っていた。日本のアニメーターたちの哲学もにじみ出て大変興味深かった。日本文化のキラーコンテンツの１つであるアニメを取り上げ、制作の舞台裏に光を当てたこの番組が、英語で海外に発信されたことは、日本への関心をより促す一助となって意義深い。なお、日本のアニメがワールドワイドな存在になっているというのは感覚的には分かるが、そのことを示す客観的な統計やデータがあれば、アニメ事情に通じていない視聴者に対しても日本のアニ メのすごさを伝えられるのではないかと思った。

（ＮＨＫ側）　スティーブ・ジョブズと日本のつながりについて、2021 年正月に３０分版の番組を放送した。この時は新版画だけを取り上げていたが、その後、追加取材をしていくうちに、デザインファーストという経営哲学や、当時のアメリカにはなかった手法をソニーから学び、アップル製品に生かしたという具体的な例を知り、追加取材分を加えて５０分の集大成版として完成させたのが、「Steve Jobs and Japan」だ。
ナレーターのビル・サリバンさんも３０分版と同じで、統一感を重視して起用した。日本語版については、６月１７日土曜日に、ＢＳ１で夜９時から放送予定で、まもなく制作に入るところだ。

（ＮＨＫ側）　2015 年にスティーブ・ジョブズと新版画のつながりを知って以降８年間、ジョブズと付き合いのあったさまざまな人への取材を続け、少なくとも４８枚の新版画を銀座の画廊で購入していたことや、焼き物にもかなり熱心であったことなどが分かってきた。ジョブズの日本文化への情熱には取材者として私自身驚かされたが、かつてゴッホが浮世絵を模写したことによって日本人が浮世絵の価値を再発見したように、ジョブズの新版画への情熱を通して日本や世界の人々が新版画や陶器の魅力を、インパクトを持って知ることもあるのではないか、と感じた。実際、新版画を専門に売っている店に、投資目的で海外からの客も来始めていると聞いた。ジョブズは、谷崎潤一郎の『陰翳礼讃』も読んでいて、日本文化を理解しようと努力していたのだと思う。私たちは、日本から生み出すべきものを、ジョブズの日本への情熱を感じることで、もう一度考えた方がよいかもしれない。日本語版の放送も多くの人に見てもらえるよう努力したい。

（ＮＨＫ側）　「WIT STUDIO」は、アニメや漫画のファンに届けたい番組だが、幅

広い視聴者にどのように届くのか不安だったので、よいコメントを得られたことは嬉しい。THE ANIME STUDIOシリーズでは、「攻殻機動隊」で有名なプロダクションＩ．G、「サイバーパンク　エッジランナーズ」という大人気作品のトリガーについて、２エピソードを放送し、「WIT STUDIO」は３本目として制作した。国や地域による、作品のトレンドには大きな差異がある。届ける方法として、これまでは放送が主な手段だったので、その国や地域でどの作品が放送されたかにより人気の作品は異なる。現在は、インターネットの普及によって、作品が全世界に紹介されるので、差異は埋まりつつあると感じている。多言語展開について、さまざまな言語の権利を獲得することが困難なことに加え、その国や地域に合わせたカスタマイズ、例えばキャラクターの名前やセリフの変更などにも労力がかかることから、英語とともに各言語化を進めるのは現実的ではない。アニメファンへの日本語の浸透について、感覚的には、かなり進んでいるのではないかと思う。２本目のトリガーの回の中で、英語でインタビューに答えていた人が、日本語で「作画」と言っていた。「作画」という言葉は、アニメファンの中ではすでに馴染みのある日本語のようだ。インターネットでは、海外の有名人が、日本アニメで日本語を覚えた、好きなアニメの声優さんが日本語の先生だったなどと発言しており、アニメが日本語を普及させているケースは増えているのではないか。多角的な視点で日本アニメを深く掘り下げるべきだという意見は、今後制作する番組の中で生かしていきたい。今年度は、THE AMINE STUDIOシリーズに加えて、「ANIME MANGA EXPLOSION」という新番組もスタートさせる。この番組は、アニメをさまざまな角度・視点で深く掘り下げようというねらいで生まれた企画だ。日本アニメの物語性についても取り上げる予定だ。昨年、「セーラームーン SPECIAL」を制作したが、ストーリーや背景について深く考察した番組で、大変好評だった。「ANIME MANGA EXPLOSION」の第１回放送では「ベルサイユのばら」を取り上げる。作者の池田理代子さんも出演し、宝塚歌劇団の舞台化成功の話や、アニメ制作時にどのように原作に近いものにしていったかなど、１つのコンテンツをさまざまな視点で掘り下げていく。アニメ人気について客観的なデータで示すべきだ、という点について、数字的な説得力を加える努力はしたいと思う。できるだけ実証的なエビデンスを紹介できれば説得力にもつながると思うので、意見を参考にしたい。